
とある自由な亡霊偽装 《ゴーストフォックス》

RYT

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ゴーストフォックス
とある自由な亡霊偽装

【Nコード】

N9942U

【作者名】

RYT

【あらすじ】

学園都市、二三〇万人もの学生が暮らす街。開発により様々な能力をもつ学生が暮らす街。

その中の一人時恩 劉導じおん りゅうどうもちろん能力者である。

上条と同じ学校に通いながらレベル4の能力者。

だが彼の本来の力はそんなものではなかった。

一方通行、御坂ともつながっていて、人には言えない深い闇を抱えている。

そんな彼の話です。

原作に介入したり、しなかったりします。で、原作のいろいろな部分に自分なりの解釈をくわえていきたいと思っています。時系列は若干あやふやかもしれませんが。

第一話（前書き）

以前まちがえて短編として投稿してしまいました。
再度改めて投稿いたします。
よろしく願います。

第一話

ここは学園都市。

東京の西武を開拓して作られた人口200万人を超える都市。その中の約八割が学生である。

学生なので当然授業や学校はあるのだが、この都市はその時間割り《カリキュラム》を超能力の開発に使っている。

超能力にはレベル1《無能力者》からレベル5《超能力者》の五段階で評価される。

超能力と正式に認定されているのはこの町でも7人しかない。

軍事的にも産業的にも圧倒的な力を持つ7人だ。なんでも一人で軍隊と戦えるとか。

さて現在時刻はAM8…29.

学生は学校に行かねばならない、むしろ急がないと遅刻という時間帯だ。

「あゝ、まずいねこりゃ・・・」

彼、時恩^{じおん} 劉導^{りゅうどう}は寝坊した。

もうすぐ夏休みということで昨夜は少し遅くまで起きていたのだ。基本10時に寝るといふ時恩にとって日付を超えるまで起きているというのはかなり珍しいことであり、そして体は正直にいつも通り8時間の睡眠を取っていたのだ。

「まあ、さすがに学校行かないと怒られるな。厄介極まりないな」
そう思って玄関を出た矢先にいつもの声が聞こえた。

「不幸だー!!」

どうやら隣も何かやらかして遅刻しそうな感じらしい。

こうなりゃ、あいつも誘って二人で学校サボるか。赤信号、二人で渡れば何とやら、だ。

そう思って時恩は隣の玄関のドアをノックした。

現在時刻はAM11:56。

場所はとあるファミレス。いるのは時恩と上条当麻の他にかなり年上の学生がちらほらいるだけ。自分たちのようにサボりなのか、もしくはめっちゃ頭やお家柄の良い学校だろう。

この時間帯は大体どこもそんなものである。二人は四人掛けのテーブルに座れ、引け目を多少感じながら少し早い昼食である。

「あゝ結局学校サボっちゃったかね」

「いやいや、サボっちゃったかねじゃないですよ。おかげで上条さんは夏休みの補習がもう決定事項です・・・」

時恩はブラックコーヒーを飲み、上条はふつうのオレンジジュースだ。

ちなみに上条は節約らしく一番安いドリンクバーのみ。時恩は二人でつまめるポテトやからあげを適当に頼む。

「俺は普通の夏休みだぜ。第一無能力者ってだけではそうはならんだろ。」

「少しは能力がないとさすがに不利です。」

「無脳力だったっけ、お前？」

「グサッ。モウ、ヤメテクダサイ。」

「分かりました、幻想殺しサマ。」

時恩はつい最近上条の隣に引っ越してきた。

引っ越し早々口論になり（何で居候がいるのか、という問題。最終的にその銀髪シスターが上条を食い殺しそうになった）

戦い（銀髪シスターが時恩と上条の部屋の食糧を奪いそうになった所を協力仕合い何とか防御し）

お互いを讃えあった（時恩が安くて腹の膨れる料理を上条に教えそれでシスターの暴走は何とかおさまった）。

その時にお互いの能力の事を知り仲良くなったわけである。

他にも女性の好みのタイプは（上条は「寮の管理人タイプのお姉さん。代理も可」で時恩は「何考えてるか解らない小動物系。セクシーなら尚更。」）やお互いの交流関係について熱くグダグダな会話をしていると不意に上条の顔が引きつった。

「?どうかしたか。」

「ウソだろ…。」

恐る恐る振り返るとそこには御坂美琴が立っていた。何やら驚いたような絶好のチャンスを逃したような不機嫌な顔だ。

「ただの中学生だろ？」

時恩は全く面識の無い中学生に動じずコーヒーに意識を向ける。

「アンタ、こんな時間になにやってんの？」

御坂は少し驚いたような顔で上条に訊ねる。

「いやいや、お前こそ何やってんの？学校サボるとか不真面目極まりないな。しかも絶対お前中学生だろ。」

そう時恩は挑発気味に御坂に応える。本来イタズラ好きな時恩である。相手が誰にしろこんな調子だ。そして上条がビビるならそれな

りの能力者だろう。どんなものか知っておく必要はある。

「ふん。私たちの学校は今日が終業式なのよ。サボりじゃないのよ。」

「おーおー。中学生は気楽極まりないな。上条もなんか言ってるやれ」「いやいや時恩。その辺にしとけて。ビリビリも短気で怒りっぱいからだからそろそろ電撃ぶっ放すぞ。それにサボりかどうかは確かめられないし」

「アンタまで！だ、れ、が、サボりだって！！」

案の定、御坂の電撃が二人に飛ばしてきた。

（しまった！あのバカは大丈夫だけでもう一人は…）

慌てて御坂は後悔したが、もう遅い。当麻は右手で防いだ。そして時恩は…

「あれ？」

当麻の向かいに座っていたはずなのにいつの間にか消えていた。その為、電撃は上条が二発分喰らうことになる。伸ばした腕が避雷針代わりになり二発も引き寄せたのだ。

その電撃が消えた直後、劉真はまた現れた。美琴は目を丸くする。テレポートのようなものだろうか？でもこんなに長い時間消えることなんてできるのだろうか？

「え？え？何？アンタ、こいつもテレポーターなの？」

「うーん。そんな感じかな。時恩の能力は」

「おい、中学生。こいつもってことは知り合いにいるのか？」

時恩は御坂の言葉に反応して訪ねる。

その目があまりにも鋭いもので御坂はさっきまでの雰囲気と全く違う時恩にひるんだ瞬間

「おねーさまー！」

白井黒子が乱入してきた。

第一話（後書き）

いかがだったでしょうか。

第二話（前書き）

駄文ですがよろしくです。

第二話

突然現れた白井に時恩は目を丸くした。

「電撃娘よりもガキじゃねえか…」

その言葉には反応せず、ただ「お姉さまと一緒に二人も類人猿がいる」事に白井は鋭く反応する。

「なんですの、貴方達は。愛しのお姉さまと一緒にいらして。お姉さまに会うにはまず私を通してから」

「違うのよ、黒子。こいつが用があるのはあなたらしいわよ。」

「へ？」

今度は白井が目を丸くする番である。

「この類人猿が私に何の用ですか？」

「いやーちよつと風紀委員の支部に連れて行ってほしくてな。」
ジャッジメント

猿呼ばわりされてかなりイラッとしている時恩だがそこは年上の余裕を見せる。猿にはあまり良い思い出がないのだ。

「よろしいですわよ。なら一緒に行きましょう。」

と時恩の右手を取ろうとする白井だがその手を引っ込められ

「行きたくないんですの？」

今度は白井がイラッとした。これでお互い様と言わんばかりの笑みを時恩は浮かべ

「テレポートしなくていいよ。道案内みたいな感じで先導してくれれば」

「テレポートの方が早くてよろしいですの」

「まあな。でも次に一人で行くとき場所わかんないし。道案内しながらでも普通にいくよりも早いだろ？」

「それはそうかもしれませんが、そもそもいったい支部に何の用ですの？」

「ああ、こいつジャッジメントに入りたいんだって。」

上条が代わって説明した。

「こいつ、最近そういつて聞かないんだ。」

「なら、丁度いいですわ。私もジャッジメントの一員ですもの。」

白井はそういつて自分の腕章を見せる。

「一応先輩なんだな。年齢的には俺が上だけれどもな。」

「そんなことを言うようでは人間の器は小さいですわね。」

「はいはい。まな板さん。」

こうなると売り言葉に買い言葉。二人の言い争いはヒートアップしていく。

「そもそもいったいあなたは何の能力者ですの？」

白井はイライラをぶつけるように聞く。テレポートを拒否するなどありえない。

「高速移動」の利便性においてそれ以上の便利な能力は無い。だがこの男はしなかった、一体なぜ？

「ああ、そういえば応えてなかったな。自己紹介自己紹介。忘れっぽさ極まりないな。」

「俺の名前は時恩劉導。レベル4の亡霊偽装。ゴーストフオックス能力は…まあ、基本あんたと同じかな。」

「あら、私もレベル4ですよ。でも…お姉さまには敵いませんわね。なんてったってレベル5ですから。」

これなら合点が行く。空間移動系の能力者は同じ系統の能力者を移動させることは出来ないのだ。

「…確かに、レベル5は敵じゃないな。さて、そろそろ案内頼むわ。」

「まあ、いいですわ。まずはあそこまで行きましょう。置いて行かれても知りませんわよ」

「上等」

そういつて二人は一瞬で消え、後には上条と御坂が残された。

「あ。時恩め。金払ってねえ。俺が全額払うのかよ。不幸だ…」

「あんたどんだけ金欠なのよ…いいわよ。このぐらい私が払ってあげるわよ。」

「マジですか！恩にきります！」

それにしても、上条は思った。消える一瞬前の時恩の顔。付き合いはそんなに長くない。でもわかる

あれは、おもしろい事を思いついた顔だ。何をしてでも目的を達成しようとする目だ。

そしてあいつの考えは未だに分からない。そもそも何故インデックスが初対面のはずの時恩の家に突入し、あまつさえ食糧を頂こうと

したのか。確かに人見知りはいらない彼女だが。その事を聞いてみると、「んゝ何となくだよ。」とはぐらかされてしまった。時恩もケラケラ笑って答えてくれなかった。

時恩がそもそも何歳なのかも上条は知らない。同じクラスではあるが、それだけだ。とても同世代とは思えない行動だ。精神年齢と行動と言動が合致してないのだ。その点も笑ってはぐらかされた。
(ま、いいか。そのうち分かるだろう)

奢ってもらったということが嬉しく、上条はそこで思考を止めた。そしてこの判断は失敗だと気が付くのは後になってからである。

第二話（後書き）

いかがですか。

主人公紹介（前書き）

ここで主人公のことを書きたいと思います

主人公紹介

時恩 劉導

じおん りゅうどう

身長178cm 若干色が黒い。髪は短い。体は細いが鍛えられている。少し童顔

服装 私服↓白Tシャツ、ミリタリーベスト、青ジーンズ、黒ブーツ 首に銀のネックレス。両手に銀のブレスレット

口癖 「～極まらない」が特徴。基本は標準語。

性格

イタズラや人をからかうのが好き。

だがSという訳ではなくどちらかというといじられ役。

頑張りすぎて自分を追い詰める。

誰かを助けたい、という気持ちが人一倍あるがゆえに誰からの助けも望まない。

暗い顔は人前で見せないようにしている。過去に闇を背負っている。

能力 亡霊偽装「ゴーストフォックス」

空間を移動するときに任意の時間で移動できる。飛距離は100m。ただし、自分にしか使えない。

移動にかけられる時間は最長で5分。
その間は誰にも手出しできない。

だが、移動中は目的地を変えられない。
相手が移動するの意味がない。

電撃を避けたのは10秒後に現れるようにその椅子に戻るよう
移動した。

「5分の不可侵時間」でレベル4になったようなものである。

ちなみに・・・彼の能力はまだこれで全部ではありません。全部
は話が進んでいくうちに出そうと思います。

主人公紹介（後書き）

と、
いう感じです。

第三話（前書き）

黒子と時恩の話です。

第三話

「次、あのビルの屋上までいきますわよ。」

「はいはい。先輩サマ」

時恩と黒子はテレポートを繰り返して支部まで進んでいく。

一瞬で二人の人間が現れ、数秒したら消える。そんな風景を町のいたる所で繰り返される。

だが、特別騒がれることもない。ある程度は見慣れた光景なのだろう。

そして二人も必要最小限の会話しかせずに進んでいく。どうやら意地でも時恩を引き離そうとしているようで、その黒い空気にだんだん時恩が耐えられなくなってきた。

「なあ、黒子よ。あの電撃娘なんだけどさ」

「お姉さまに手出しは許しませんわよ」

鬼のような形相で睨まれた。

まだ何も言っていないよ俺。

「レベル5って強いのか。」

「はいい?」

今度は思いっきりバカにされた顔で見られた。

「レベル5はこの都市に7人しかいませんのよ。230万人もいるにも関わらず。その価値がどれだけ重要かあなたは分かっていますんのか?」

「うーん、そうなのか?」

白井はふとテレポートを止めた。それに習い時恩も止まる。

一辺30mはあるだろう広い、だが少し古びた屋上だ。そして直径10m程の大きな貯水タンクが一つある。おそらく最近は使われていないだろう。手入れすればすぐにでも使えそうだが。

「そんなに大口言うなら私に勝ってみなさいな。」

白井はこれ幸いとばかりに時恩に勝負を挑み

「そんなことしたらけが人が出るぜ。このあたりも大変なことになること極まらないぜ。」

時恩はにやりと笑って黒子に向き合う。

「なっ!? 誰がけがするんですの?」

この余裕はいったいどこから来ますの?

内心焦りながら黒子は太ももの武器に手を伸ばす。頑丈な金属でできた矢だ。弓は必要ない。テレポートの能力があればどんな弓よりも正確に相手を射抜くことができる。

対して時恩は何も持たずにいる。そして

「ふっ」

時恩は鼻で笑い、そして

「俺だ。」自信満々に答えた。

「なんですの!? その使い古された落ちは!?!」

さっきまでの緊張感も一気に消え、黒子は脱力した。

この殿方、もしかしてレベル4つてのはハッターですの? 第一、テレポーターは相手に直接武器を叩き込めるのが利点、なのに丸腰な

んて一体どうやって相手を封じ込める気なんですか？

「一応聞いておくのですの…本当に私と同じレベル4なんですか？」
「ん…本当のことを聞きたい？」

時恩はいたずらっぽい笑みを浮かべた。まるで今まで隠しておいたものがばれて、それでもまるで反省していない子どものように。

「じゃあ言うよ。お前と同じ訳ないだろ。本当はレベル6だ。」

「…冗談はいい加減にしてくださいですの。」

はあ、と黒子はため息をつく。

「面白かった？」時恩は相変わらず笑っている。

「全く面白くありませんですの。」

「俺は面白かった。やっとお前がまともに口きいてくれたからな。」

「そうですの。それは良かったですわね。」

「ほんとだよ。普通にしてればお前可愛いのに」

さらっと言われたこの言葉に黒子は不覚にもたじろいでしまう。

「なっ、何を言ってるんですの。私にはお姉さまがいますのよ」

「あはは、そうだった。残念」

全く残念そうにみえない時恩。相変わらず笑ったままだ。

「それが一番面白い冗談でしたわ」

黒子はそう笑って移動した。次はあの広場のようだ。

さあ、俺も行くか。時恩も黒子の方向に進路を定める。

でもやっぱりあいつには敵わないな、って何思い出してんだ俺は。
あいつとはもう・・・

ふと思いつ出した想い人の顔を振り払う。

久々にある程度使っとくか。ストレス解消にもなるし。

時恩はそう考えタンクに狙いを定め・・・能力を発動する。

うん、鈍ってないな。それにこの状態でこれなら結構いいんじゃないか？

そして時恩は黒子の近くに移動する。

「遅いですわよ。」

「申し訳極まりない。あとどれくらいで着きそうなんだ。」

「もうすぐですわよ。私の所属する支部ですの。」

「ふーん。ところでお前のことなんて呼べば良いんだ？」

「はい？」

「一応先輩だろ？でも年下だし。この微妙な極まりない関係。」

「普通に呼んでもらえれば結構ですの。」

「わかった。んじゃ、早く行こうか白井さん」

「では、私は時恩さんで」

「・・・そっか。俺は年上の後輩だからお互い様だな。じゃ、それで」

そういつて二人は支部に向かう。今度は置いて行かれる心配はないようだ。

さて。とあるビルの屋上。

そのビルの管理人は頭を悩ます。

いつの間にかタンクが無くなっていたのだ。跡形もなく。

周りには爆発物を使った形跡も、強引に切り取った形跡もない。ただただ、消えていた。

第三話（後書き）

ごちゃごちゃ過去の話も推敲します。
でも内容は変わらないです。

第四話（前書き）

ジャッジメントに到着、そして

第四話

時恩は白井に支部を案内されていた。

「で、ここが私の支部ですの」

セキュリティを解除してもらい、中に入ると二人、作業をしていた。

一方は頭に花を咲かせている、背の低い少女。

もう一人は少し厳しそうな、しかし片手に牛乳を持っている女性だ。

「と、いう訳で頼んだよ、初春。」

「分かりました固法さん。」

固法さん、と呼ばれた女性は部屋を出ようと振り返り、そこで初めて白井と時恩に気が付いたようだ。

「あら、白井と・・・もう一人は？」

「初めまして。時恩と言います。」

「ジャッジメントに入りたいらしいですの。」

「えっ、私に後輩ができるんですか！」

頭に花の少女が振り返る。とても幼い顔立ちだ。

「・・・でも年上っぽいですね」

何故か少し残念そうな花の少女。いや、お前以下の学生ってそもそも入れないか？

「まあな。後輩っても俺は高校生なんだけど。」

「えっ、高校生なんですか？そんな風には見えませんけど」

「童顔ですわよね。とても一年生には見えません。」

「だろ？ 実際俺18なんだけどな。」

少しばかりの沈黙の後

「ええっ！！」女性三人が声を上げた。

固法は明らかに驚いた顔をし、初春は「私もあんな風に幼く見られてるのかな」と若干不安そうにし、白井は「年齢と見た目のギャップが」とぶつぶつ呟いている。

俺ってそんなにガキっぽく見られてるのか…。

「まあ、いろいろ事情があってな。今はちゃんとした高校一年だよ。ややこしさ極まりないけどさ」

「で、ジャッジメントに入りたいんだって？」

気を取り直したように固法が訊ねる。

「理由は？」

「悪い奴を捕まえたい。」

時恩は笑顔で答える。

またこの顔ですの。白井は思わずうつむいてしまう。この顔はどうも苦手だ。

「で、初春は何をやってるんですの？」

時恩の顔から逃げるため、白井は初春に話しかける。

「今は虚空爆破事件^{グラフィトン}について調べてるんですの。」

「なんだ、それ。」

時恩が話に入ってきた。白井は顔を見ないようにパソコン画面に集中する。初春はパソコン画面から目を離さずに説明を開始する。

「アルミ缶の量子の速度を急激に増加させ、それを一気に周囲にまき散らす。要はアルミを爆弾に帰る能力ですね。」

「物騒極まりないな。」

「まだ死亡者は出ていませんが、犯人の特定ができていません。だから早く犯人を捕まえないと。」

「そのうち出るかもな。死人が」

「そうしないために私たちがいるんでしょ。」

固法が出入り口の近くで話す。どうやら初春の報告は分かっていたようだ。

「じゃあ、私は帰るから後はお願いね。」

「あ、固法さん。俺は結局入れるの？」

「そうね、時恩君がなにか手がかり掴んだら私からも推薦してあげる」

「手がかりって、この事件の？」

「もちろん。それ以外に何があるの？」

「いやいや、正規のアンタらがまだなのにそれを見つけると!?!」

「そういうこと。じゃ、がんばってね。」

微笑みながら固法さんは帰って行った。

「あ、私も。今日は佐天さんと服を買いに行くんで」

そしてあつという間にパソコンの電源を切り初春も帰って行った。

また時恩と白井の二人になった。

「うゝむ…俺も一応学校に顔出す。終業式の日ぐらい出ないとな」

「あなた、サボってるんですの!?!」

「サボってるのではない。面倒なだけだ。」

「それを世間一般ではサボリと言うのですの」

時恩は聞く耳持たずの感じで

「じゃ、行ってきます。」

そういつてその場から消えた。

「はあ、全く」誰もいない部屋で白井はため息をつく。

そして、自分も何かをつかもうとパソコンに向かう。そして丁度パソコン画面に映った自分の顔を見る。何だか疲れている感じがする。どうも時恩といると調子が狂ってしまう。白井はもう一度ため息をついて作業に取り掛かった。

その頃時恩は高速で移動していた。今日の学校は午前中で終わっている。今更いつても全員帰っている途中だろう。そもそも終業式はまだだ。

今、時恩が向かう先は

「さっきのデータ、どうも負傷者にジャッジメントが多い。狙われているのはジャッジメントの可能性が高い。ならあの花の女の子の周りにいれば現れるのでは。」という理由で目下のところ初春を搜索中だ。

あの子、見るからに能力強そうに見えないし。

パソコンの情報を見ると人に被害を与える爆発は必ずジャッジメントが巻き込まれている。

それが偶然かはわからない。違いかもしれない。だがおそらく犯人はどんな場所でも爆発させるだろう。それが一番の怖さだ。下手に爆発させれば規模の大きさでは被害は計り知れない。

服を買いに行く、となれば大型のショッピングセンター。そして中学生が行くとなればおのずと限られる。

そしてあの場所から一番近いのは

「・・・ここだな。第七学区セブンスミスト」

そして初春を見つけた。傍らには髪の高い女の子と短髪の子。

「おい花の女の子」

時恩は声をかける。

いつものように笑いながら。

大切なものは今も昔も変わらない。俺の周りにいる人の笑顔。それを壊すのは許さない。

たとえ同じ罪を犯しても、全てを敵に回しても。

第四話（後書き）

なかなか難しいですね。特に固法さんの動かし方が

第五話く強さの義務く（前書き）

虚空爆破事件に近づく時恩

第五話〈強さの義務〉

「おーい、花の女の子。」

時恩はそう初春に声をかけた。

ここは第七学区セブンスミスト前。いわゆるチェーンの洋服店だ。女の子用の服が多く、そんな所で堂々と声をかけると

「初春、いつの間に彼氏ができたの？」

「さささ佐天さん。違いますよ。この人はただの後輩です。」

初春は慌てて訂正する。両手も盛大に振り否定しているのを見て「そんなに嫌かよ。」と少し落ち込む時恩。確かにデートの待ち合わせに見えなくもないよな。

「どうもお二人さん、初めまして。時恩劉導です。」

「あ、初めまして。私、佐天涙子って言います。初春の親友やっけます。」

「私はいらないわよね。」

そこで初めて時恩は気が付いた。

「なんで電撃娘が善良な方々と一緒にいるん」

何の気なしに時恩は呟き：終わらないうちに雷撃の槍が飛んできた。それをあっさりレポートで避ける時恩。

「お前、周りの人々のことも考えろよ。巻き込まれでもしたら不幸極まりな…」

ひょっとして、と時恩は雷撃が飛んで行った方向を見る。

そこにはウニみたいな髪型をしている高校生ぐらいの男がぶっ倒れ

ていた。どうやらさっきのが直撃したらしくプスプス黒い煙を上げている。

近くにはまだ幼稚園ぐらいだろうか、少女がおろおろ「どうしよう、どうしよう」と軽いパニックになっていた。

電撃娘。お前、どんだけ上条のこと好きなんだよ。

と内心思った時恩だが口には出さないようにした。そして上条を蹴飛ばし目覚めさせ、不安がっている少女を落ち着かせ、改めて自己紹介をする。

「で、時恩さん。何をしにここまで来たんですか？」

初春が素朴な質問をする。実はそれが一番の障害なのだ。

さすがに服を買いに来た、とは言えない。だが狙いがジャッジメントかもしれない、などと聞いたらこの電撃娘は怪しい人物にかたっぱしから電撃を浴びせまくるだろう。その中にはひょっとしたら「犯人」もいるかもしれない。だが予想される被害のほうかはるかに深刻だ。

と、いう訳で

「いや、初春さんの見回りに付いて行こうか、と思ひまして。」

…かなり苦しい言い訳だ。案外ウソが下手だったりする。

「今は完全にプライベートなんですけど、まあいいですよ。ところどころ教えてあげます。」

意外に信じてくれた一っ、と内心ほっとする時恩。

「だったら決まりですね。行きましょう。」

「時恩さんってなんでジャッジメントに入りたいと思ったんですか？」

佐天は興味深々で聞いてくる。どうやら彼女からもOKをもらえたようだ。最大難関は御坂だが、すでに上条との言い争いに夢中のようだ。しばらくは帰ってこないだろう。

そうやって三人と二人は店に入っていく。

その時初春の横を通った一人の男。あまり可愛いとは言えないカエルヌイグルミを手に使っていた。そして三人を見てニヤリと不敵な笑みを浮かべる。そしてヌイグルミに何かを入れた。

「へー、時恩さんも高位能力者なんですか。」

ここは店の中。さっそく佐天の好奇心が爆発する。能力はあるのか、あるとしたらどんなものなのかという一般的なものから彼女関係まで持ってくる。

こいつ、尋問の素質があるんじゃないか、と時恩はその会話の引き出し、持って行き方、頭の回転速度に舌を巻く。もしこれで何か能力を持ったらかなり強いだろう。

「いいですよ、私なんて無能力者ですもん」

「でもよ、都市伝説で簡単にレベルを上げられる幻想御手レベルアップなるもんがあるらしいぜ。まあ噂だけだな」

「それって大丈夫なんですか」

「確実にヤバイシロモノでしょう。麻薬みたいなもんだろうな。」

グダグダと他愛もない、しかし居心地のいい空気を時恩は感じていた。

「で。時恩さん。」

初春が思い出したように聞いてくる。

三人は休憩がてらベンチに座り話している。右に初春、左に佐天、真ん中に時恩。両手に花状態の時恩。

時恩は先ほど買ったミルクティーを飲みながら初春の方に顔を向ける。

「なに？」

「彼女さんはどんな人なんですか？」

思わずむせる時恩。最近の子どもは進んでるな、となんとなく感心しそれでも答える。

「今はいねえよ。元カノは、まあ、一言でいえば無能力者だよ。」

「えっそうなんですか？」

「てっきりいるのかと」

「それに同じぐらいの能力者かと思いました。」

マシンガンさながらに言葉を飛ばす両脇の二人。

「それは偏見だろ。同じぐらいの能力者しか好きにならないなんて。実際電撃娘はあのレベル0に惚れてるじゃん」

「確かに。」

二人はそろってうなずく。よし、うまく話題をそらせた。つつうか、バレバレだぜ、電撃娘。

そう思った時恩だが

「やっぱり時恩さんはその、『彼女さんを守ってあげたい』とか思ってたんですか。」

目をキラキラさせながら佐天は聞いてくる。その目を見てウソが言えるほど時恩は凶太くない。

正直に

「あいつだけじゃないよ。あいつの周り全てを守るって決めた。」
キヤーと声をあげる初春と佐天。完全にガールズトークになっている。

「それでそれで、何で別れちゃったんですか？」

これって学校サボった罰なのか、だとしてもちよっと酷くない？
ガールズの勢いに観念した時恩は覚悟を決め一気に全部話す。

「別れたっていうか、自然消滅っていうか。急に向こうからの連絡が途絶えてさ。俺も会いに行くこともままならないし。そんなある日突然だよ。『お前とはもう会わない』って連絡来たのは。返信したけど繋がらないし。それっきりだよ、あいつとは」

まあ、俺がいなくてもあいつは強いから大丈夫だろう。そう言っ
て会話を終わらせるつもりだった。と、いうかこれで終わりのつもり
だった。

「その彼女さんの写真はありますか？」

…もういいだろ！やめてくれ！なんで俺の恋バナをしないといかん
のだ！しかも二人とも全然聞き飽きてねえし！

その時初春の携帯に連絡が入った。どうやら白井からのようだ。

「初春、今どこにいますの！衛星から観測された次の爆破地点は第
七学区のセブンスミストですの！」

「私、ちょうどそこにいます！」

「なんですって!？」

「時恩さん、佐天さんを連れて避難してください。一応あなたはま
だジャッジメントじゃないですから。」

「いやいや、女の子を置いて逃げろと？カッコ悪さ極まりないぜ。」

「だったら避難の誘導をしてください。それに女の子一人も守れない人はカッコよくないですよ。」

：つまりこの佐天を守ること。それが今の俺の仕事であり義務ってことか。

なんか上手く丸め込まれた気がする。まだまだ新入りって立場上仕方ないかな。でもこれぐらいはさせてくれてもいいよな。佐天にも気が付かれないように時恩は能力を発動する。

「今度は二人は守れるようになるよ」

「もちろんですよ。期待してます。」

そして二人が避難し安全だと思われる場所まで走っている途中、腹の底まで響くような、地鳴りのような音がした。

まさか、こんなに威力があるとは思わずに啞然とする時恩。そして「うい…は……る…？」

佐天の声。さっきまでの快活な声じゃない。

まずい！今の佐天は思考がグチャグチャだ！何も考えられてない！

時恩は慌てて崩れ落ちそうになる佐天を支える。

「初春ー！」

時恩を振りほどき店の方に駆け出す佐天。その足取りはフラフラだが視点は固定されたままだ。そして何も見ていない。

「行っても無駄だよ。どうせ死んでる」

その声は誰が発したのだろうか。野次馬が集まってきていて何もわ

からない。だが佐天の耳には確かに聞こえた。絶望に突き落とすかのような声が。

その場で泣き崩れる佐天。さっきまでの活発で無邪気でそれでいて女の子らしい様子はどこにもない。今はただ泣き崩れる一人の子どもだ。

時恩は佐天の近くに行き

「大丈夫。レベル5がいるんだ。このぐらい平気だよ」
ひとまず優しく声をかける。今は落ち着かせることが最優先だ。

「でも…でも…」

佐天はもう何がなんだか分からないように泣いている。本当にいたたまれない。

「大丈夫。よく見ろよ。店以外は無傷だぜ。あんだけ大きな音がしたら普通は建物ごと崩壊するだろ？それが無いってことは音だけってことだよ。」

時恩は幼い子どもに優しく語りかけるように話す。それを聞いて佐天は少し落ち着きを取り戻してきたが

「でも誰かがっ…死んだって…無駄だって…」

やはりまだまだ中学生か。しっかりものに見えてもこういうことには慣れてないな。

慣れている俺も嫌な存在だが。

そして聞こえていたんだな。あの声が。

冷静に今の状況を整理し次にやるべきことを組み立てていく時恩。

その時、建物から誰かが駆け出してきた。初春だ。それに気が付い

た佐天はまた泣き出した。

ただ、今度の涙の理由は違うようだ。抱き合って泣き出す二人の仲良しを見守る時恩。上条や御坂、そして巻き込まれたであろう幼い少女の無事も確認した時恩はその場から消える。

彼女を泣かした人、自分の友人を殺そうとした人物に会いに行くために。

誰よりも強い者は誰よりも優しくあるべきであり、護るべき存在でそしてその点でいえば自分は限りなく弱い、そう自覚しながら。

その時の時恩の顔を見たものはいない。ただ野次馬の中のある少年グループはオカルトチックなことを信じるようになった。

曰く

「人が死にそうな所には死神が出てくる」

（確実に死んだ。これは死んだ。強い力を使えるようになってきた。この力で新しい世界を作るんだ。そしてそしてっ…）

路地裏を歩きながらそう考えていた爆弾魔、介旅初矢はふと気が付く。
かいたびはつや

いつまでこの路地裏を歩いてるんだ？さっきから一步も前に進んでいない…？そして建物が崩壊する音が聞こえない…？

「よお、爆弾野郎」ふと後ろから声をかけられる。そこには短髪で色黒の少年がいた。

「危ねえじゃねえか、死人が出るところだったぜ。それにあんな威力だったら建物ごと崩壊して、二次災害は免れないじゃねえか。」

「ば、バカな。僕の最大出力だぞ。あんな建物の柱の一つや二つ壊せるはずだ！そうでなくても今はレベル4以上の力を持っているんだ！」

「へーそうかい、今、アンタ自分がやったて認めたな」

アクセサリーを一つもつけていない少年が近づいてくる。介旅は自分の傍らにあるバッグに手を入れ、爆弾と化すスプーンを取り出しそうとし

（あれ？ない？）

思わずバッグを覗き込む。その中にはスプーンは一つもなく代わりに拳よりも大きなアルミの塊があるだけだ。形は歪んでいるがどうやら中身もしっかり詰まっているようでかなり重い。

（いや、これなら）

「おい、お前！これを見ろ！」

その塊を見せつける。

「これだけ大きくて中身もあれば威力はさっきの比じゃない！こっちに来るならこれを爆発させるぞ。」

「やってみれば？」少年は平然と答える。

その言葉に介旅はカッと来たのか

「見ろ！これが僕の力だ！」

そう叫び能力を発動、アルミの塊を爆弾に変える。

「さあどうすんだよヒーロー気取り！この爆弾が爆発したら！お前は死ぬ！そして二次災害だって」

「ストップ。ところでお前はどうなるの？逃げなくていいの？」

少年は笑いながらそう聞く。

そこで介旅は気が付く。ここは路地裏。狭い空間だと爆弾は威力が跳ね上がることに。

「じゃあ、これやるよ。」

そう言って介旅はアルミを時恩に投げつけ、後ろを振り向き出口に向かい走る。だがその行動は無意味だった。

介旅は何かにぶつかった。だが目の前には何もない。

「な、なんだよ！これ！」

介旅は周りを見茶苦茶に叩き、走ろうとする。だが全て徒労に終わる。

彼がさっきまでいた場所から1m四方は壁に囲まれているように身動きが取れない。まるで牢獄だ。そう爆弾魔は戦慄した。

そして彼の足もとには自分で生み出した爆弾がある。

こんな狭い中で爆発したら。結果は考えるまでもない。二次災害どころではない。おそらく死体も残らない。

さっきのあいつの能力か？

「た、助けてくれ！」

介旅は目の前にいる少年に懇願する。その少年は胡坐をかき顎を肘について

「やだね。お前はそういう思いを何人にさせたんだ？」

「ひっ…」

その少年の目を見た爆弾魔は腰を抜かした。こいつ楽しんでやがる！「いやー逃げないなんて優しいね。自己責任取るんだね。偉い偉い。」

」
「う、うるさい！一体お前は…」

「ところでさ、トランプって知ってる？」

介旅はとうとう恐怖に支配された。ここでその単語が出てくるはずがない。

自分も最近知ったばかりの本当に噂。この都市の噂。

そして足のアルミの塊が爆発の予兆を見せ始め

「死神…」

そうつぶやいた直後、介旅の意識は暗転した。

第五話く強さの義務く（後書き）

長くなりすぎました

第六話く沈黙と真実く（前書き）

事件の後、時恩は…

第六話　沈黙と真実

「つてことで固法さん。これで俺はジャッジメントの仲間入りですね。」

時恩は誇らしげに言う。

それを見た固法は

「：分かりました。ま、犯人を捕まえるなんて思ってたし。ここは素直に大手柄だと褒めておきましょう。」

ここは第177支部。いるのは時恩と固法の二人だけだ。

「それにしてもね。まさか犯人を絞め落とすなんて。危ないとは思わなかったの？」

「高位能力者ってのは大概その強さにまかせっきりですからね。不意打ちして演算できなくさせておけば一分そこで気絶しますよ。」

「そしてそこに御坂さんと私たちが駆け付けた。ということね。」

「下手したらあいつまたスプーン爆発させかねませんもん。タイミング良かったですよ。」

「本当にそうですこと。」

いつの間にか白井と初春が帰ってきたようだ。初春も一応被害者であるが立场上、現場の検査をしなくてはならなかったのだろう。ぐったりと疲れている。

「お、白井さんに初春さん。お疲れ様」

「本当ですよ。大体なぜ時恩さんは手伝わなかったのですの?!」

「まだ正式にジャッジメントのなってないしな。素人が現場を荒ら

すのは良くないし。第一、犯人逮捕したんだからいいじゃん」

ここまで言われると返す言葉がなくなる白井である。言ってることは間違っていないし筋もおっている。二人の会話は駆け付けた、というところからしか聞いてないがやはり言い分は正しい。

？待ってくださいですの。そこまで考えたところで白井は違和感があることに気が付いた。

なんですの、この感じ。ほんとに小さなことだけど、見逃してしまったような。そしてそれが後に大きな失敗になるような。

ダムに見つけた小さな穴。そこを見逃すのは簡単だ。だがそこから決壊するかもしれない。

一体どこにおかしなところがあつたのか。それを考えているうちに

「じゃあ一応報告をまとめね。セブンスミストで爆発が起きたものの迅速な誘導。そして御坂さんの力によって全員無事。犯人は時恩君が絞め落とすという荒業で無事、無傷で逮捕。この活躍で時恩君は正式に私たちの仲間に加わることになる。以上ね。」

「ありがとうございます。じゃあ、俺はこれで失礼します。」

「明日から正式だからね。ちゃんと来るのよ。」時恩は帰ってしまった。

「どうも納得いきませんの。お姉さまは何か気が付きませんでした？」

ここは常盤台中学の寮、御坂と白井の部屋である。二人とも寝る格好のまま話している。御坂はファンシーなパジャマ、白井は何か色々ざりざりなネグリジェだ。

「時恩の変なところ？ そうねえ、私が見たときは時恩が犯人を落とした直後で、そばに拳ぐらいのアルミの塊があって、いつもみtainなへらへら笑いで『あー危なかった』って言ってたわよ。」

そのことを聞いた白井は何か引っかけりを覚えた。何か、何かあと一つピースがあれば：

「そういえば黒子。あの爆弾魔っていったい何を使ってたの？」

「まあ簡単に手に入るものです。アルミ缶が主ですけども…」

突然白井は黙り込んだ。待ってください。そうなるといういろいろおかしな点が出てきますの…。でも…もしかして、いや…ひょっとしたら…。ぶつぶつぶやいている。

何がそんなに引っかかるのだろうか。御坂は疑問に思う。

あの犯人も結構きれいに落としてたし…あれ？

御坂もおかしな点に気が付く。

「ねえ黒子。時恩ってさ…」

「私もちょうど似たようなことを考えていましたの。時恩さん呼び出しましょう」

「…で？ 真夜中にこんな河原に呼び出して何の用だよ。眠さ極まらないんだが。」

時刻は日付を回るところである。御坂と白井は時恩に連絡を取り

「話があるから河原に来てください。」と呼び出したのだ。

「いえ、ほんの確認事項ですの」

白井は笑みを浮かべながら、しかし警戒しながら話しかける。

「まず一つ目ですが、貴方はどうやって犯人を無力化させたんです

の？」

「いやだから絞め落として…」

時恩は河原の土手に座って面倒臭そうに答える。丁度その下にいる二人を見下ろすような感じだ。

「そんな痕跡どこにもなかったわよ。」御坂が切り返す。

「あの人にもあんたにも暴れたような跡はなかった。いくら体力的に劣っていても、いえだからこそ相手は必死で抵抗しその痕跡が残るはず」

「ただの偶然だろ。もしくは相手が虚弱だったか」

時恩は何事も無いかのように答える。

「では二つ目ですの。あなたは何故相手がスプーンを使うとわかっていましたの？」

「だって、バッグから見えたし。大体簡単に手に入るんだったらスプーンとかだろ？」

「いいえ。あのバッグにはスプーンは入っておらず、代わりに拳大の大きさのアルミの塊があるだけでしたの。そして、どのデータにもスプーンを使ったという報告はありませんの…今日までは。」

「までは、ってことは今日あったんじゃないか」

「はい、ありましたの。あのセブンスミストの爆弾。そして、それが爆発するときには貴方は店の中にはいらっしやいませんでした。これは初春からの証言でもあります。そしてもう一つ、その拳大の塊がそうらしいんですの。わずかですが原型が確認されました。つまり誰かが圧縮してあんな形にしまったんですの。」

「だからって俺には関係ないよな。おれの能力、知ってんだろ？」

「ではあともう二つだけ確認します。私たちジャッジメントが丁度あの場に駆け付けた理由をご存じですか？」

「俺の日頃の行いがいいから」

「いいえ。あの場でまた爆発が起きそうでしたの。そしてその反応は突如消えました。」

「いやいや、俺の移動能力は自分以外の生物には使えないし。そもそも消えるって何だよ？あの場に有ったじゃん。」

「では、最後の確認です。『トランプ』とはなんですか？」

その瞬間、時恩の顔から笑みが消えた。真顔になり何かを逡巡したような顔をみせ

「トランプ、か。その単語の意味、どこまで知ってる？」そう聞いた。

「別に何も。ただそのグループが大きな力がある、ということだけ知っています。都市伝説にも近い噂ですけど」

「あの犯人が口走ったのよ。トランプの復活。あの噂は本当だったって」

「おーおー。おしゃべり極まりないな。」

そう言って時恩は立ち上がる。そして御坂と白井のところまで下りてくる。

「でも証拠がない。おれはただの一般市民。いやジャッジメント。何にもないさ。俺は俺だ。」

「証拠ならありますのよ。」

「防犯ビデオにアンタが映っていたのよ。あの路地裏の」

「それ良いことじゃね？」

「ええ。ずっと映っていましたの。そして時恩さんが見えなくなった直後」

「私とジャッジメントが来たってわけ。」

「つまり、貴方には絞め落とす時間はなかったのですの。これっておかしくありません？」

時恩はしばらく考えていたがおもむろに両手を上げて

「降参」

潔く答えた。

「悪いね、黙ってて。あの男は絞め落としてないよ。ただの窒息さ。」

「でも、どうやってですの？」

「もちろん、こうやって」

そう言っただけは何もない空間を指さし

「ROOM—P」

宣言した。

だが特別何か起こった雰囲気はない。

「別に何もありませんの。ねえ、お姉さま。：お姉さま？」

御坂からの返事はない。先ほど時恩が指さしたあたりをまるでパントタイムをしているかのように、何もないところに壁があるかのように触っている。まるで見えない箱に触っているかのように。

「え？え？なにこれすごすぎる。ここ、何もないけど何かある。」

その言葉に、白井もその場所に触れてみる。確かに、そこは何もない空間のはずだ。だが手に触れる感触はかなり固いものだ。

「一体これはなんですか？」

「この中にいりゃ酸素はそのうち尽きるだろ。あとは軽くパニックにすればあつという間さ。」

「そうではありませんの」

「あ、中にいる限り外部からの干渉はほぼ不可能だから。まあ中から外も無理だけど。衛星の反応が消えたのもそれだろ。で、あいつが気絶したから能力も解除されちゃったんじゃない？」

「そうではないですよ！ 貴方はいったい何者なんですか？」

「前にも話したはずだけど。」

時恩は笑いながら言う。だが目は笑っていない。真剣な目で白井を見つめる。

「おれはレベル6さ。ゴーストフォックス幽霊偽装ってのは俺の得意技。まあ他にもいろいろ技術はあるんだけどね。6の二つ名は」

そこで時恩は一息入れる。ついでにROOM-Pも解除する。御坂が少し残念そうに見えるのはスルーしておこう。そもそもこいつは拘束用だ。牢獄なのだから。

ディメンジョンロード
「時空覇王」

その名を口にする。この名をあいつかからもらい、そして奴に認められたくてここまで来た。

眠りから覚めたときは驚いた。まだ数年しか経過していない。

そしてすぐに上条と出会い、仲よくなった。白井や御坂、初春、そして佐天など個性的な女の子にも会えた。始めて思った。この時代で死んでもいいと。

「この学園都市の能力者。その初代頂点に立った男。空間系能力者のハイエンドさ」

第六話く沈黙と真実く（後書き）

展開が急すぎますが、いい加減に明かしておかないといけないかなとも思う訳です。

第七話く比較く（前書き）

時恩の能力判明。

第七話く比較く

「アンタがレベル6？」

御坂が半信半疑で訊ねる。

ここは真夜中の河原である。周囲に人影はなく、ここが都会だということを忘れてしまいそうな静けさだ。

その中で響く御坂の声。隣にいる白井も驚きを隠せないようだ。

「そ。そんな感じ。正確には分からないけどおそらくそのぐらいだろうね。」

「何ですの、その曖昧すぎる返事は？」

「だって久々に起きたら10年後だぜ？そりゃ基準なり色々変わってると思うのが普通だろう？」

「そうね。起きたら10年も経ってたら…って10年！？あんた10年も寝てたってどういうこと?!」

御坂の声がうるさい。先ほどの静けさは御坂の勢いで身を潜めてしまっている。

こいつ、本当にお嬢サマ学校の生徒なのかと時恩は疑ってしまう。

「この能力は体力使いすぎるんだよ。ちょっとぐらいなら大したところ普通に寝れば大丈夫なんだけどもあまりにもやりすぎると…年単位で寝ちまう。まあ。その時はさっきみたいなの『ROOM1F』を使えば大丈夫なんだがな。」

「そうになると、貴方いったい何歳になるんですの?」

当然の疑問を口にする白井。

それはそうだ。年単位で寝る、ということはそれ相応の年月を過ごしてきたということに他ならない。だが時恩は童顔ということを差し引いてもせいぜい10代後半、下手すると半ばにも見えてしまう。

「んゝ秘密だね。まあ釣り合っていないということだけでも教えておこう。それにまぎれもなく肉体年齢は18さ。」

時恩は笑いながら答える。

これが頂点に立った、そして私の能力のハイエンド。…まったく信じることも尊敬もできませんわね。白井は素直にそう思った。こんなへらへらした人物がお姉さまよりも強い、なんて考えたくない。

「で、能力の規格っていうのかな。その一番上はなんて言うんだ？」

「おそらく同じよ。0から5まであつて最高は5。その上に誰も到達していない6があるわ。」

「なら間違いない。俺はレベル6だ。」

時恩はそうハッキリと言った。その瞬間、彼の目が少しの悲しみと後悔の色が浮かんた。白井がそれに気づいた瞬間、その色は消えた。

そして、…ああ。白井は気が付いた。

時恩の笑顔が苦手な理由がわかった。彼の目は優しいのだ。優しすぎるのだ。おそらく目の前で彼に銃を向けても笑って許されるだろう。撃ったとしても怒りもしないだろう。全ての頂点に立つからこそ、全てを許す。それはつまり

（どこまでいっても独り。お互いに本音を言うことなくただ許すのならそれは馴れ合いでしかありません。この方はおそらくずっと独りで。何歳かわからないけれど少なくとも自分の知っている人生よりもずっとずっと長く）

それがこうやって自分たちに心を開いてくれているようだ。白井は少し安心した。おそらくジャッジメントに入りたいというのも嘘ではないだろう。自分が存在した証しを残す。そうしたかったのだから。

気づいたとき、周囲の誰も自分のことを知らなかったら、そう思うと非常に怖い。学生の10年は大きい。おそらく以前の同級生は誰もこの都市にいないだろう。とそんなことを考えていた白井の耳に突然入ってきた言葉。

「あんた、私と勝負しなさい！」

「はあ？」

時恩はワケノワカリマセンという顔をする。

お姉さまの悪い癖ができましたの。白井はため息をつく。

「あんたが本当に強いのか私が試してあげるわよ。」
やるき満々の御坂に対し

「眠さ極まらない。」

やる気より眠さのほうが勝っているようだ。

「と、いうか電撃娘、もとい御坂。」

時恩は大きなあくびを一つしてけだるそうに言う。

「今ならお前よりも強い相手知ってるぜ。おそらく最強、つつーか誰も勝てないような」

「いったい誰よ、そいつは！」

川に背を向けた状態で時恩は座った。空気椅子のように腰を浮かせ

て。まるでそこに本当に座るものがあるかのように背も後ろに預けて、だが倒れない。ゆったりとした長椅子に座っているようだ。そしてすぐにでも寝てしまいそうな声で一言

「睡魔」

直後、雷撃の槍が飛んできた。時恩は避けようともせずに眠そうに目をこする。

（勝った！避けられるタイミングじゃない！）

そして雷撃は時恩にまっすぐ向かい、直後、川の水が破裂した。

「え、何？」

「ん？別に何も。」

時恩はすでに半分眠りの世界に入っているようだ。コックリコックリしている。

「アンタ真面目にやんなさい！」

御坂は磁力を使い砂鉄を掌に集め、剣を作る。そして時恩にまっすぐ切りかかる。

「へーそんな使い方もできるんだ。便利だね。久々に誰かの相手してやるか。ま、俺の方が応用性極まりないけど」

時恩は立ち上がりもせずに、見えない長椅子（おそらく先ほどみたいに空間を固めているのだろう）に座ったままだ。

そこに全く手加減なしの砂鉄剣の一閃。

それを時恩は避けない。

砂鉄剣は時恩の顔の前で動きが止まる。

「っこれなら！」

御坂は前髪から電撃を飛ばす。がそれもやはり時恩にあたる直前で止まる。

「少しは反撃しなさい！」

御坂は焦れたように叫ぶ。そんな声に構わず時恩はゆらゆら長椅子を揺らしている。

眠いのは本当のようだ。

本当に、圧倒的な実力差でなければ、出来ないことだろう。

「アンタ！やる気あんの！？」

「最初はあったかもね。でも、今は完璧にない。」

そう言って大欠伸をする。その隙に電撃を放つ御坂だがこれもあっさり避けられる。

「ねえ、白井さん。今何時？」

時恩は「もう止めようぜ、こんなこと」とありありと顔に書いてある。

あの殿方もおそらく毎回毎回こうやってるでしょうね、と白井は少しだけあの無能力者と目の前の男に同情した。

「もうとつくに日付越えてますのよ。」

「ありがと。じゃ御坂。そして白井さん」

時恩は決心したように

「俺、帰る。」

そう宣言する。

「ふ、ぎ、け、る、なーーー！」

御坂は剣を鞭のように伸ばし、時恩を狙う。一点集中、突破力を上

げた突きだ。

その攻撃を時恩は飛んできた虫のように手首だけで払う。軌道を変えられた剣は時恩の背後の地面をえぐる。

チェーンソーのように触れただけで切れるその剣を素手で触った時恩は

（なんで無傷なのよー！）

傷一つなく、そして全く痛くなさそうだ。そんな余裕な時恩を見た御坂のイライラは最高潮に達する。

「また明日。いや、日が昇ったらかな。」

そう時恩は言って空間移動する。一瞬で視界から消えた標的に御坂は悪態を飛ばし

「この私が怖いから逃げるんでしょ！この意気地なし！そんなに私が怖いのかしら？しょせんあなたごとき私にかなう訳ないわよねー

（笑）」

思いつきり挑発しそして白井の脅えた顔に気が付く。

「どうしたの、黒子」

「お姉さま、う、うしろ…」

振り返った御坂の目に入ったのは

「こんな夜遅くまで出歩いて、なにをしているのかな？」

常盤台中学の学生寮、その寮監のどす黒い笑みだった。

やれやれ、全く眠いぜ。こんなに長い一日は初めてだ。

自室まで戻った時恩はやっと一息つく。

あの二人から呼び出された後、嫌な予感がしてで電話を掛けたのだ。

常盤台の寮へと。

ジャッジメントの要件だといえはすんなりと通してくれた。

だがその当人たちはいない。その時間には既に河原だ。もちろん門限は過ぎている。

二人がいないことに気が付いた寮監が二人を捜しに出てきた、ということだ。

（あいつ、すげーな。おそらく直であの場所に来たぜ。透視能力でもあんのかな：そんな訳ないか）

そんなすげー寮監に捕まった二人の今後を想像しようとし：なんか怖いのでやめておく。

うとうとしつつ思い浮かんだのは（今のレベル5って大したことない。あいつらの方がやばかった。）

そしてどんな能力か思い出す前に、眠りに落ちた。

この夜からしばらくの間、常盤台の寮には「真夜中に聞こえる叫び声」だの「許しを求めてさまよう幽霊」だのという噂話が流行ったという。

第七話く比較く（後書き）

さて、もうすぐジャッジメントとして働きます。

第八話くファミレスにてく（前書き）

暗部登場。

第八話くファミレスにてく

とあるファミレスである。

そこには四人掛けの席に時恩と佐天、初春と白井というペアで並んで座っていた。

昼食時のこの時間なのでこの四人も休憩中である。

時恩はその能力の特性上、白井の管理下に置かれることになった。もつとも白井はぶつくさ文句を言いながらもなんだかんだ教えてくれる。あれでなかなか面倒見は良いようだ。

そこにプライベートの佐天が来て、なら初春も呼ぼう。という事になり、そのまま今に至る訳だ。

雑談しながら時恩の話になり、結局何の能力なのかと佐天が聞き、そこで時恩は本当の事は上も知らないんだけど、と前置きしたところで

「え？上には能力のこと話してませんか？」

白井の機嫌が傾いた。時恩としては、こんな能力おっぴらにしたら何があるか分かりませんぜ予測不能さ極まりないもん、という考えだった。今の第三位をはるかに超える強さだ。それを知った上がどんな反応するのか分かったもんじゃない。

だが、白井としてはジャッジメント自ら身分を詐称するのは許せない。

二人の口論が始まりそうな所で初春が一言

「白井さんってそんなに時恩さんの事気になるんですか？」
特大の爆弾を落とした。

「はあ？」

二人の声がシンクロした。

「ほら、そういう仲良いところとか。よく二人一緒にいますもんね。」

「そ、れ、は、この人が私の管理下に置かれていますの！私は先輩としてこの方を指導しなくてはなりませんの！」

「ホント、助かってるよ。この前なんて夜中に呼び出されてさ…」

悪乗りする時恩である。もちろんこの時は御坂もいた、あの河原に呼び出された時の事である。もちろんそのことはボカし、「呼び出されて色々聞かれた」ことを強調し話す時恩。

「意外に大胆なんですネ、白井さんって…」

初春はこれで弱みを握ったとばかりにホクホク顔だ。一方佐天は

「あれ、どうしたの。ボーっとして。おーい、佐天ー？」

時恩の隣にいる佐天は白井の方を見たまま動かない。

まるで後悔しているような、出遅れてしまって焦っているような、そんな感じだ。

あまりにも固まっている佐天を見た時恩は解凍してやろう、と少しイタズラを思いつく。

そっと佐天の耳元に口を寄せ

「涙子、こっち向いて」と、優しく甘く語りかける。

その後、「ボンッ」と音がしそうな勢いで耳まで赤くなった佐天が思いつきこっちを向いたので危うくキスしそうになり、それを見た白井が「公衆の面前で破廉恥なことを」とオニのようになり、時恩も上司がまさかここまで怒るとは、と慌てている。初春は「わー

三角関係。初めて生で見た。なんかスゴイ」と完全に蚊帳の外の野次馬である。

そして時恩はこんなに騒ぐことが結構久々で内心結構楽しんでいたりしたのだが、上司が金属矢を構えたところで慌ててその場から脱出。「すぐに戻る」と残されるであろう二人（主に佐天）に声をかけ、決死の逃避行を開始した。ふふふ、逃がしませんわよ、と白井もまた後を追う。残された二人はやや茫然としていたが時恩の言葉を信じ、暫く待つことにした。

「時恩さんって空間移動できるんですねー。逃げ足早かったですね、佐天さん。」

「私は絶対に逃がさない」

「え?!」

結局、時恩がかなり疲弊して帰ってくるのはそれから40分後の事である。

そのファミレスの反対側で四人の少女がおしゃべりしていた。

ひとしきりガールズトークに花を咲かせた後、ふと一人の少女が

「そういえば麦野。超気になる噂があるんですけど」

見た目中学生だがそのワンピースはかなりギリギリだ。まるでどこから見えてどこから見えないかを知り尽くしているかのような感じだ。

「一体何よ。最近面白い話は何も聞かないわよ」

麦野と呼ばれた女性は面倒臭そうに答える。

「そうよ、それより最近のお仕事やりがいありまくりな訳よ。結局

そっちの方が面白い訳よ」

缶詰を食べていた金髪の少女も声を上げる。

「大丈夫。全員に否定されているきぬはた」

「誰も超応援してくれないんですか!」

絶叫する絹旗。

「せっかく超苦労して手に入れた話なのに」

「いったいどこで手に入れたのよ」

「いつも行ってる映画館の隣の裏路地」

「信憑性ゼロじゃねえか!」

麦野の突っ込み。おそらくレアである。

「でもなんか気になるんですよ。なんか暗部に関する事なんですよ」

「ここまで引張って面白くなかったらどうなるか分かってんだろ
うな、淫乱。」

麦野が若干イライラしている。ここまで来たら後には退けない。
絹旗は覚悟を決め

「あのですね。ランプがどうのとか、その活動が再開するとか」

「ねえ、それって結局ポーカーとかそっち系じゃない訳?」

「大丈夫。早とちりする絹旗も私は応援する」

あっという間に窮地に立つ絹旗。だが麦野は押し黙ったままだ。

「む…麦野? 超どうしたんですか?」

「ねえ、絹旗。本当にトランプが活動を再開するって聞いたの？」
急に真面目な顔をして麦野は訊ねる。

絹旗は（ひょっとして仕事以上に真剣？）と思いつつ

「はい。超確かに言っていました。」

「そう：ところで皆はトランプの存在を知ってた？」

麦野は訊ねるが首を横に振る三人。

やはりこの噂は上位の能力者しか知らないようだ。

「トランプってのは、ただの噂。昔この都市にはレベル5が13人いた。そいつらが組んだグループ。それがトランプ。まあ、初代暗部、私たちの始祖って感じかしらね。」

「麦野レベルが13人！？そんなの超ありえないじゃないですか」

「でも、その噂は流れる。そもそも上位能力者しか知らないこんなにも不確かな噂。都市伝説にもならない程度のもの。でも仮に何か尻尾があるとしたら」

そこで麦野はニヤリと笑い

「面白いことになる。全力で戦えるんだからね。」

ここは窓の無いビル。その中にいる人間アレイスター・クロウリー。様々な機器を見ながらつぶやく。

「まさか、奴らがな…。まあいい。どのような影響がプランに出てもここは楽しく見守るとしよう。」

統括理事会も黙認することがこの瞬間決定した。

前代未聞の潰し合い《ショー》が。

第八話くファミレスにてく（後書き）

という訳です。

第九話く怪物の出会いく（前書き）

トランプ出すのはもう少し後になりそうです。

第九話　怪物の出会い

「くそ暑さ極まりねえ」

時恩はぼやきながら自室でゴロゴロしていた。もう夏休みも終盤、残すところ一週間である。

課題等はもちろんあるのだが七月の内に終わらせた時恩は残りの休みをゆつくりと過ごす事に決めた。

そのつもりだった。ジャッジメントの仕事も大方こなせるようになってきており、白井と二人と共に「逃げられない二人」《デュアルハンターズ》と呼ばれるようになった。

二人ともテレポートが使用できる上、時恩に至っては頂に立った男だ。大抵のチンピラは物の数に入らない。時恩は素手で戦うタイプだが相手はボコボコ、こちらは無傷なのだ。

町の治安が良くなりつつあるので特別に少しばかりの休暇を固法さんから頂き冒頭の決意を胸に一日ごろごろダラダラ過ごそうと決めた時恩。

そこに白井から携帯に連絡が来たわけである。

「緊急事態発生ですの。現場検証ですが時恩さんに来てもらった方がよろしいかと思ひまして」

「拒否」

「そんな権限はありませんわよ。来ないとおっしゃるのでしたら能力のこと…」

「だー！白井さんキビシー！」

「何とでもおっしゃって下さい。とにかく、来るように」

一方的に切られた電話を見つめ時恩は一言

「厄介極まりねえ」

と、いう訳でちゃっちゃと終わらせてまたゴロゴロする為に全力で移動した。

（これは一体なにがあったんですの？）

白井は周りを見回した。工場の近くにあるコンテナや線路のある場所（操車場というらしい）は悲惨な情景になっていた。

線路や鉄骨は折れ曲がり、吹き飛び、ねじ切られあちらこちらに突き刺さっている。

コンテナもいつもは綺麗に積み上げられているのだろうがいまはグシャグシャに崩され、溶けているものもある。

その周辺には爆発したような跡がいくつもあり、まるで怪物が暴れまわっていたような形跡になっている。

（時恩さんなら予測つく筈。この被害をもたらした人物がどのくらいの力量なのか。）

だが白井にもそして周りで作業している大勢のジャッジメントも予測はついている。こんなことが出来るほどの人物はレベル5だと。

（お姉さまは何か知ってるんでしょうか）

白井は先ほど拾ったコインをポケットの中でそっと握りしめる。どこにでもあるようなゲーセンのコインだ。だがそれは超電磁砲を撃つために御坂が好んで使うものだ。

色々と不安に駆られている白井だが、

「ここ何？ 特撮映画を実写化でもした？」

この声だ。この声を聴くとなんだか心の荷が軽くなる気がする。まるで嘘のように、幽霊のように跡形もなく消えていく。理由は分からない。だがそれでいいだろう。少なくとも、今は。

「遅いですよ、時恩さん」

白井は切り替える。いつものように、いつもの二人の関係に。

現場での情報を集め終えた二人は支部に戻る。集めた情報をまとめ、整理し上に報告の為の書類を作るためだ。

「ってことは一晩であなつたのか。」

時恩は椅子に座り、報告書をまとめながら驚く。

一通り聞き込みも終わり、現場検証も行った結果、おそらくあれはたった一夜で出来たものようだ。また、昨夜大きな光り輝く球体が周辺上空に突如出現しまた突如消えた。という報告もある。もつとも時恩は鉄骨にさわり、爆心地を歩き回り、コンテナを見上げていただけだが。

「初春、レベル5のデータ見つかった？」

時恩は欠伸を噛み殺しながら訊ねる。どうやらさっさと帰りたいらしい。だが仕事は仕事でしっかりやって帰るのでどうにも注意しづらいのだ。

「あ、はい。バッチリです。」

初春はプリントアウトしたデータを時恩に渡す。

「へー、今は七人か随分少なくなったな。」

感慨深そうに時恩は呟いた。彼の知る頃（おそらく10年前）はもつといたらしい。

「何々、ベクトル変換や新物質創造、精神操作に最大原石。レーザーに電撃娘に、そして六位は…」

面白そうに資料を読み始める時恩。どうやら今のレベル5に興味が湧いたようだ。

「そういえば、時恩さんが眠る前のレベル5と今のレベル5はどちらが強いと思いますか？」

初春が興味深々に訊ねる。ついでに言えば佐天も時恩は10年間眠っていたことを知っている。その時佐天は「年齢なんて」とぶつぶつ言っていた気もするが。

「バンクにあるだろ。その頃の資料ぐらい。たかだか10年前だろう？」

時恩は資料から目も上げずに答える。

「それが、無いんですよ。なんか、そのあたりだけデータがポツカリ抜け落ちてるんですね。どこを探しても無いんですよ。」

「ま、そりゃそうだろうな。あんな黒歴史なんぞ」

「え？時恩さん何か言いました？」

「いや、何も。」

そう時恩は笑って答える。そして初春の質問に答える。

「このデータを見る限りだけど、おそらくあれだな」

時恩は笑いながら今のレベル5の資料を一瞥し、ハッキリと答える。

「こいつら、レベル5に認定もされないな。おそらくあの時のレベル5一人で全員やられるよ」

「そんなこと無いですよー」

初春は笑って言うが白井はこの前の河原での出来事が有るため笑って流せない。

「まあ、一人を除けば、だけどね」

時恩はふと付け加えるように言った。

その夜、操車場に一人で来た時恩。ゆっくりと惨劇の場を歩いていく。

その足取りはまるで何もない道路を歩くかのように堂々としている。そして、両手にいつも存在するブレスレットは無い。そのことが更に彼の足取りを確かなものに行っているようだ。

「オイ」

突然声が降ってきた。コンテナの上からだ。

「ここは三下なんかの来るとこじゃねえんだよ。三秒以内にそこから消えな」

時恩は振り向きもせずその者の前にテレポートする。

「初めまして。俺の後継者にして失敗作。一方通行」

「アア！？誰だお前？」

「犯人はその場に舞い戻るってな。なんとなく来てみたんだが大正解だ。」

「うるせエンだよ三下！ぶち殺されてエのか teme！」

「アンタに俺は殺せない。そんなこと無理極まりない。」

それが一方通行の逆鱗に触れたようだ。

一方通行の周りの風が吹き荒れ始める。だがそんな暴風の中でも時恩は意にも介さない。

「無理だっつってんだろ。」

時恩の周囲は静かだ。あまりにも静かだ。彼の周囲では、許可無しに動くことを許されないかのように。

かつて学園都市の頂を制覇したものと、現在制覇しているもの。

始祖と最新。
怪物の喰らい合いが始まる。

第九話く怪物の出会いく（後書き）

とうとうおっぱじまります。

VS 一方通行。

第十話く護るく（前書き）

バトリます

第十話く護るく

一歩通行と時恩の間はわずか数m。コンテナの端と端、対角線上に二人は向かい合っている。

「愉快的死体に変えてやんよ！」

一方通行は脚力のベクトルを操作し猛スピードで時恩に向かう。だが

「遅いこと極まりねえな。」

時恩は空間移動し隣のコンテナに飛び移る。コンテナ間は10m以上はあるが頂点同志の戦いにその距離はあってないようなものだ。

「なんだなんだ！？大口叩いといって逃げ回ることしか出来ねエのかよ！」

一方通行は線路を踏みつけ鉄骨のベクトルを操作し時恩の頭上から雨のように降らせる。

その範囲は半径50m以上。その中にいれば必ずどれかは串刺しになるだろう。そう思わせる程の鋼鉄の豪雨。

「これで終わりだ三下ア！」

「あやま」

時恩は間抜けな声を出した。直後、彼の周囲に鋼鉄の雨が、無慈悲の槍が降り荒れる。

「口ほどにもねエ」

一方通行は自らが降らせた鉄の雨を見て呟く。その無数の鉄は地面に深々と突き刺さり、今度は森のようになっている。運悪く、その場にあったコンテナすらやすやすと突き破っていてこれを受けきるのは並大抵ではまず無理だ。

あれだけの大量を見せつけられればまずパニックになりまともな演算は不可能だろう。

そして顔には雑魚に時間を取られて無駄だった、とでも言いたそうな気怠そうな表情。

「弱エなア」

もう一度口から本音をこぼした。

「ホントだよ」

それに答えるように背後から返事が聞こえた。

「ッ！」

一方通行が振り向く前にその背中に衝撃が走る。まるで硬いもので背中を殴られたような感じだ。

（バカな！俺の反射が！）

体勢を立て直し、一方通行は攻撃が来た方を見る。そこには（ただの正拳突きだと！？）

拳を前に突き出した時恩がいた。

「やっぱり。空間ごと吹き飛ばせばダメージあるんだね」

そういつて今度は回し蹴りをする。その場で。だがその勢いは荒々しく、触れるもの全てを薙倒さんばかりの勢いだ。そして

（グハッ！）

今度は一方通行の腹部にダメージが来た。

（あの野郎ですら俺には右手でしか触れてねエのに）

こいつはそれが全く関係ないように攻撃してくる。どんな能力者もそれだけで勝利してきたかのように。

「なあ、第一位さんよ」

時恩は話しかける。だがその手は止めない。蹴り技、突き、手刀、

拳。激しい動きを続けながら。一方通行にダメージを与えながら
「一番強いってことはな、一番優しくなくちゃいけないんだ。誰かを護らないといけないんだ」

時恩は手を休めない。そして少しずつ一方通行に近づいていく。

「だけどお前は誰も護れなかった。優しくもなかった。それでは頂に立つことは出来ない」

まるで自分自身にも言い聞かせるかのように時恩は言葉を紡ぎだす。

「誰にも必要とされないお前は後継者であっても失敗作だ」

その言葉にとうとう一方通行の膝が崩れた。もう二人の距離は1mも無い。

時恩は先ほどから攻撃しているがもちろん殺さないように手加減はしている。

(こんなに使うのは久々だ)

と思ってしまうほどに動いた。

「だから一步通行」

倒れた頂に向かい、時恩は告げる。

「お前が誰かを護る時、それがお前が真の頂点に立つ時だ。」

始祖の頂を超えられなければ、その先は見えない。記録とは、過去とは塗り替えられる為にあるものなのだ。

それは先輩としての優しさか、越えられないと自負する自信か。

「うわー、やさしい！『ROOM』を使わないなんて」

突然、甲高いこえが響いた。どうやらコンテナの上に誰かいるようだ。いや、誰かではないだろう。時恩には聞き覚えのある話し方だ。そして自分の技術も知っている。だが、彼女はいないはずだ。10

年前に確かにこの世からいなくなったはずだ。

「おい、紙名^{かみな}。お前なのか？」

「そー！せーいかーい！やっぱ相変わらずだね時恩君。」

姿を現したのは高校生ぐらいの女子だ。その黒髪はやや長く、肩の下まで伸びている。身長は時恩よりも数？低いだけの抜群のプロポーションをもつ美女だ。今はセーラー服のようなものを着ているが、足もとは五本指靴下に下駄という何とも惜しい格好をしている。

「突っ込むところは色々ある。だがまずは」

「えー。わたしのどこにつっこむのー？時恩君やらしー！」

「黙れ変態！そもそもお前はなんで今ここにいるんだ！」

「だって私いまこの町の第六位だもん」

こともなげに答える紙名。

今のレベル5は一人を除き性格が破綻してるって聞いたことあるが、こいつは破綻ってよりも破壊的だ。一番こいつが最後まで敵陣に残っていたっけ。時恩はそう思い浮かべ、そして遅れて言葉の意味を正しくはじき出す。

「はぁ！？お前が今の第六位？ウソだろ？！」

初春のデータにはそんなこと書いてなかったぞ！

：あ、そうか。こいつお得意の情報操作か。パソコンだってお手の物。だってこいつの能力は

「うそじゃないもん。だからこの一方通行君を助けに来ましたー。」

「そう言って紙名はにっこり笑う。」

「と、いうわけで死んでください、時恩君」

その直後コンテナが一斉に時恩に襲ってきた。コンテナの側面はパツクリと開かれ、まるで口のように、牙のようにギザギザになった断面をむき出しにして。

「文字通り、俺に牙を剥きやがって！相変わらず悪趣味だな物質操ワンスサブス駒！タンス」

「あなた程ではないよ。それぞれ全く性質の異なる空間技術を20以上も生み出した霸王にね」

「褒め言葉と受け取っておくぜ！」

そんな会話を交わしながらもコンテナを破壊し、避ける時恩。だがその数はあまりに膨大だ。そして背後に回り込もうが上空に逃げようがお構いなしに牙は向かれる。そもそも口なんてどこにもないのだ。だからこそどこにでも口を作れ、牙を剥ける。触れた物質なら思いのままに操れる。それが彼女の能力。

（相変わらず、どこにも死角がねえ！）

時恩はひとまず逃げることにした。

「おい紙名！ひとまず勝負はお預けだ！」

「いーよ。目的は果たせたし。一方通行はひとまず無事みたいだし」時恩の申し出を素直に聞き入れた紙名。そのことに時恩は不安を感じる。

大概、こういう時の予感はあるものである。

「そのかわりー。明日デートねっ」

「はあ！？」

第十話く護るく（後書き）

オリキャラその一。紙名です。名前を考えるのに一苦労です。ついでにいいますと、トランプの能力は大体もう決まっています。

第十一話 〱 再会 〱 (前書き)

新キャラ続々

第十一話（再会）

「何で俺がお前とデートしなくちゃならんだ！」
時恩は吠える。

だがその声をさらっと受け流す紙名。

「だってーひさびさにあったんだよー？何年ぶりー？」

「…10年だよ」

その声には後悔の色が混じっている。

「まーまー。きにしないのー。だれも時恩君を恨んでないよ？だって」

「おしゃべりはその位にするべきだ」

突然時恩の背後から声が響いた。おいおい、今度はこいつかよ。時恩は心の中でため息をつく。

言ってることは仰々しいのだが声のトーンが外れている。そのせいで色々といじられ役なのだ、こいつは。

「ちょっとー。いまはわたしと時恩君がはなしてるんだよー。邪魔しないですよ、いしあたま」

「吾輩の！名前は！牛頭ぎゅうだ！間違えるべきではない！」

「おい、うしあたま」

「だから、間違えるべきではないといっている！」

牛頭は顔を真っ赤にして怒る。その身長は2mを超える大男だ。本当に牛みたいにガタイもいい。角刈りの頭に黒のタンクトップにスラックスのズボンだ。手の指には全て金色の指輪が（なんか大きな宝石付き）はめられている。

なんか闘牛と相撲取りとプロレスラーを足した感じだ。

「そろそろ時間だ。侯劉こうりゅうも待っている」

「は！？あいつもいるのか?!」

「というかー。みんないるよー」

俺の頭は混乱を極める。

なんでなんでなんでなんでなんでなんでなんでなんでなんでなんで

全員生きているんだ!!

そんな俺を面白がるように紙名は

「じゃあーまたあしたー。楽しみにしてるよ時恩君。」
そういつて二人は去って行った。

牛頭は何でも無いようにその肩に一方通行を乗せて。紙名は心底明日が楽しみという顔で。

地表すれすれまで下りてきた雲に乗って。

時恩だけが取り残された。その場にも、これから起こることにも。

高速で飛ぶ雲の中、紙名はそこにいた人物に声をかける。
と言っても雲に隠れてぼんやりとした人影しか見えないが。

「ねーあいさつしなくてよかったのー。侯劉さん」

「いいさ。今そんなことしたらあいつの頭はパニックさ。」

とても快活な男性の声が帰ってきた。

「でも侯劉さん。あそこは弟分として会うべきだったのでは?」

「そうさ。だからこそ会わなかったのさ。もし会ったらあいつのこれからのゲームに支障をきたす」

「それもそうだねー。時恩君は優しいもんねー。」

「お前がそんなに惚れ抜くのも私は理解するべきだな」
「キャッ？」

「ところで牛頭、一方通行だけ、そいつは大丈夫なのか？」

「侯劉さん、あなたの心配には及ばない。こいつの周囲の酸素濃度を調節している。いくら最強でも吾輩の周囲にいれば自然そうならざるを得ない。」

「ほう、成程」

「その上、吾輩が触れたのだ。今のレベル5なら数日は能力は戻らないであろう。」

「相変わらず恐ろしい能力だな。国喰らい《オールイーター》。」

「^{アトミックウェザー}ありがとうございます。古代万象。」

一度病院の屋上に寄り、その場に一方通行を放置、その後目的に地向かう。

「そら、もう着くぞ」

侯劉は声をかける。

「挨拶するのが礼儀だろう。紙名、頼むぞ」

「まかせてー」

雲から降りた侯劉。その髪は銀髪だ。ボサボサに見えるが手入れはしっかりされているようだ。服装もジーンズにTシャツ、ベストのボタンは閉めており、軍用ブーツ、という出で立ちだがどこことなく気品がある。

「あー。そのふくそー。時恩君に似てるー。」

「違う違う。時恩が、俺に、似てるんだ」

紙名の能力で入口を作った三人は堂々と真正面から入る。
窓のないビルへと。

「お久しぶりです、アレイスター。」

「やっほー。おっひさー。」

「お前ら、挨拶が礼儀って分かるならちゃんとした挨拶するべきだ！」

牛頭は突っ込む。だが見事にスルーされる。

「そうだな。久々だな。君たちと会うのは」

そしてアレイスターもあまり気にしてないらしい。ほっとした牛頭だが自分は挨拶してないことに気が付いた。

（これ、絶対やるべきだよな。でも、もうタイミング逃したからやれないよな。でもするのが礼儀だよな）

見た目に反してかなり真面目な牛頭。一人で悩んでいるが他の三人もお見通しだ。

（そんなことで悩まなくても）

表現の差はあるが共通認識はこの一言しかない。しかし誰も何もそのことには触れない。放っておこう、面倒だし。これもまた同じことを三者三様で思っている。哀れなり牛頭。

「それで？何しに来たんだね？」アレイスターは要件を訊ねる。

「ああ、それは……………」

侯劉が代表して答える。自分たちのゲームプランを。壮大な計画を。

「成程な」

アレイスターは答える。満足そうに。まるで予想外の事柄が予想通

りに運んだように。

「私は何も関与しない。好きにすればいい。」

そして目の前の三人、そしてここにいない他のメンバーに思いをはせる。

「思い思いのカードを切り、好きなように勝負し、ショーを楽しむがいい。トランプよ」

「もちろんだよー」

「やるべきだな」

「ありがとうございます。準備には時間がかかりますが、必ず」
そう言って顔を伏せる侯劉。

そして三人はゲーム開始の準備を始める。

学園都市全体で起こるゲームの。

第十一話く再会く（後書き）

本編に戻ります。おそらく大覇星祭やるかと。

すこしづつポイントやお気に入り件数が増えてきているのでとても嬉しいです。

これからもどうぞよろしくお願いします。

第十二話〈大覇星祭・準備〉（前書き）

改めて大覇星祭を読み返します。

第十二話　大覇星祭・準備

夏休みも終わり、秋になり、大イベントが開催される。

この学園都市での体育大会は「大覇星祭」と呼ばれ学園都市全員により行われる。

その規模は半端なく大きく一週間にわたり様々な競技が行われる。更に学園都市の外からの人々にも一般開放しているのでさらに大勢の人で賑わうのだ。それはつまり

「なんだよ固法さんこのシフト！殺意極まらないじゃないか！幾らなんでも無理だって！」

時恩の叫び声が一七七支部に響く。今日は大覇星祭の見回りシフトが決定したのでそれを確認しに来たのだが、そのシフトがありえない。ギチギチに詰まっているのだ。

「仕方ないじゃないの。皆それぞれ参加する競技があるんだから。

それがない時間帯に誰かが入るしかないでしょう？」

「いやいやいや。俺だって競技に参加しますよ？」

「だから競技とシフトは重なっていないじゃない。」

「重なってないですよ、確かに。でも、移動時間とかが全くないじゃない！大統領でもこんな分刻みじゃないぜ」

「貴方に移動時間はいらないでしょう？」

そういわれると何も返せない時恩。確かに必要ない。おそらくレポートなら誰よりも早く遠くへ正確に行けるだろう。空間系ハイエンドなのだから。もちろん、固法さんには「白井さんよりもレポートで遠くに行ける」としか申請してないが。

（そりゃあ、本気でやればね、学園都市からも余裕で出られますよ。

でもね。」

時恩最初の競技は棒倒し。そしてそれが終わり次第に13時55分までパトロール。14時から参加する競技は「鬼ごっこ」。14時40分からまたパトロール。そしてその日の最終競技「10?競争」に出て本部に戻り、報告書を書き、翌日の打ち合わせ等々をして解放されるのが

「一体何やれば21時過ぎって事になるんですか！説明して欲しき極まらない！」

「白井は怪我してるし。なら貴方が一人でやるしかないでしょう？」
時恩は勝てないことを悟った。こうなればやるしかない。大丈夫、固法さんはそんなに無茶苦茶なようにはして無いはずだ…ん？

「あのー。この鬼ごっこって確か15時まであるって申請したんですけど…」

「でも時恩君は鬼の役でしょう？早く全員捕まえばそれだけ早く終わるじゃない」

ちなみにこの種目の最速記録は51分36秒。一時間経った場合は逃げきった人間と捕まった人間の数で決まる。

「つまり、最短記録を更新しろ。ってことですね」

「そ。やりがいあるでしょ？」

笑って固法さんは言ったが時恩は、ますますテンションが下がるだけだ。

（やれやれ。まったくテキトーにやればいいか）

そう思いながら自分のシフト表をもらい、時恩は支部を後にする。

自室に帰る途中、ボーっと歩いていた時恩はふとすれ違った男女の集団の「鬼ごっこ」という単語に反応する。

「相手はあの高校だろ？」

「楽勝楽勝。何をどうやっても負けねえよ」

「ホントだよな」

どうやら自分達の対戦相手のようだ。どうやら余裕で勝てる、ということらしい。

「負けちゃったらもう次の競技から全裸でやってやるぜ」

「えー、恥ずかしー」

「どうせ負けねえってー」

時恩はポケットから携帯を取り出した。：よし、今の声はバッチリ録音できてる。

「あいつら：見てろよ。『ごっこ』なんかじゃねえ。本物の鬼をみせてやる」

その顔は「ジャッジメントの時恩 劉導」ではなく「初代頂点・時空霸王・時恩 劉導」だった。

「おーい。じゅんびはじめるってさー。時間だよー」

ここは学園都市の裏路地。紙名はそこにある少しだけ広い空間にいる。ここにいる、という確信と疑問が半々だが呼んでみる。だが返事はない。

「うーん。いないのかー。なら次、次。」

そう言って振り返った紙名の目の前に、その人物はいた。

小柄なひよろひよろの体格で、だぶだぶのズボンに上はこれまたぶかぶかのトレーナーを着ている。そして頭や顔、指の先まで包帯を巻いている。肌が直接空気に触れている部分は無いだろう。サンダラスまでしている。

「うわー。びっくりしたー。相変わらず気配が無いんだね。虎峰^{こみね}：君？ちゃん？どっちだっけ。いい加減に教えてよー」

紙名の声はまるで聞こえてない、というかのようにそのまま歩き始める虎峰。どうやら方向は大体わかるようだ。

「まってよー。わたしがあんないしないとー。虎峰…いいや虎峰っちで。とにかく一番最後なんだよー?」

「はやくはやく。これでひさしぶりにそろうんだから。トランプが全員」

第十二話く大覇星祭・準備く（後書き）

大概、祭りってのは準備のほうが楽しいですよ

第十三話　開始（前書き）

始まります。

上条さん久々。

第十三話〈開始〉

大覇星祭の長ったらしい開会式もようやく終わり、うだるような暑さの中いよいよ第一種目の開催である。

第一種目は棒倒し。時恩は「鬼ごっこ」で最速記録の更新を目論んでいたためこの競技にはあまり関心を向けなかった。だが担任である小萌先生が相手高校の教師に色々言われているのを見て、上条の一言もありクラスは一致団結した。

「さあ、第一種目は棒倒し！両校用意はいいですね！？」

アナウンスの声が響き渡る。相手はスポーツのエリート校だが、そんなの関係ないテメエらぶっ倒してやるぜこの野郎覚悟はできてんだろうな！という雰囲気はこちらにはある。

小萌先生の話がこちらは全員知っている為団結ぶりは半端ではない。

「なあ、吹寄」

時恩は近くにいるこの陣営の指揮官に進言する。

「奇襲合図はさ、俺のタイミングで出してもいいかな？」

「は？貴様は何を言っているんだ？」

「まあまあ、ここはこの亡霊偽装さんに任せて。」

「少しでも遅れたら負けてしまうぞ？それは絶対に許されん！！」
「どうやら吹寄も怒っているようだ。それはそうだな…これで俺が出し惜しみする理由はない…よね。」

「大丈夫。90秒。それ以上はかからない。そしてその後はご自由に指揮をどうぞ」

「…絶対に勝てるのね？」

「勝てない戦いはしない方が賢明極まりない」

「分かった。でもそれ以上はダメ」

「はいよ」

その直後、競技開始の合図が鳴り響いた。

「ROOM-T」

時恩は静かに宣言する。能力の効果範囲内に存在するものはこれで全て捕捉できる。後は細かい修正を加えて自軍と敵軍、さらに能力ごとにも分別する。

「…よし、吹寄。準備完了、後はテレパシー系の奴にちょっと伝えることがある。」

「って時恩。貴様まだ20秒しか経ってないぞ?!」

「うん、以外に早く終わった」

そして時恩は向こうの陣地の勢力を細かくテレパシーの係に伝えつつ、さりげなく空間を固めて味方を敵の攻撃から守ったりした。使う能力は時空覇王としてのものなので上条は捕捉することが出来ない。

だが、捕捉できない所には上条がいるので問題はない。だが、空間を固めて守ることは出来ない。よって

（ありゃりゃ、いつの間にか上条は敵陣に突っ込んでフルボッコか…ま、この隙に突撃合図をだすか。）

結果、上条という尊い犠牲を払い（大多数の男子は日頃の報いとかかりに見向きもしてないが）時恩達は勝利した。

（能力の制限は決まってるけど、ま、このぐらい大丈夫でしょう。さ、パトロールパトロール。）

小萌先生が泣きそうに救急箱を持って泣きそうになっているのを見た時恩は移動を開始した。

そんな会場を屋上から見下ろす影が二つ。

「じおん、あいつ、あまくなつたな。こんなばしよでるーむをつかうとは」

「ねえ前々から言おうと思つてたんだけど」

「なんだ、みどり」

「いや巳鳥みどりだから。間違えないで猿超えんちょうさん」

「ようけんをいえ、みどり」

「いや：喋り方とかそのバリトンボイスはカッコいいけど：発音が全部平仮名なのは…」

「ないようがつたわれればそれでいい」

「そういう問題じゃないっ！！」

「さて、担当区域はこの辺りか」

移動を終えた時恩は周囲を見渡す。ここは第七学区の端の方にあたる。

「つーかこの広い広い区を一人って：固法さんも実際、無茶苦茶だよ」

時恩はため息を一つ吐いて見回りを始める。最も10年前の無茶ぶりはこのんなものではすまなかったが。

その頃の事を思い出しながらゆっくり歩いていると

「キャー」と背後から悲鳴が聞こえた

おいおい、早速かよ！

振り替えた時恩の目に飛び込んできたのは

「じおんくんー。ひさしぶりー。元気だったー？」

フライングダイブで突っ込んでくる紙名だった。

無言で周囲の空間を瞬間的に固めバリケードを作る時恩。

その壁はあらゆる物質よりも固く、堅牢だ。

だが固まりきる前に紙名が自分に突っ込んできた。その直後に空間の硬化が完了する。つまり今の紙名は

「あれー？あれー？何で私浮いてるの？」

「丁度お前の胴体の当たりで空間を固定したんだよ。しばらくそのままでいろ。」

「えー。じゃあここでさけんでもいいの？『ジャッジメントが弱い女子を放置プレイしてますー』って」

「レベル4と5の定義を決定づけるきっかけを作ったお前のどこが弱いんだ」

「えー？なんのことかなー？紙名は全然覚えてないー。それよりもー周りの人が見てるよー」

「…あっそ」

時恩は固めていた空間を解除する。前触れもなく急に。

だが地面から一メートル以上浮いていた紙名は何の支障もなくきれいに着地を決める。

「もー。あぶないー。」

「危なくない。お前なら例え銃弾を千発撃ち込んでも平気だろうが。」

「

「でも時恩君のビンタは効くよ」

「そういう能力だろ」

「ああ、じおんくんー。わすれてしまったのー？あの二人で過ごした一夜を」

「思い出したくもないよ。記憶から消してやるってなればすぐにも頼みたい」

「あらそうですの。なら今すぐにこの世から抹殺して差し上げますわよ」

背後から真っ黒のオーラが漂うことに時恩は気が付く。そしてこの声の主も分かる。

「えーと白井さん??」

「パトロールをサボって女性と密会ですかそうなのですね。あなたはそんなにやる気が無いのですわね。」

「いやいや、そういう訳ではなく…」

「現行犯ですよ! と言い訳しますの!」

「いや…それは…」

時恩は改めて紙名を見る。普通の体操服だ。靴も有名なスポーツメーカーだ。鉢巻は時恩と違い赤。別に普通の体操服なのだ。だがそれを差し引いても確かにこいつはスタイルもよく美人なんだが…ん?

「おい紙名。お前、その体操服…」

「あー。きがついたー。そうだよー。時恩君の鬼ごっこの対戦相手は私たちの学校だよ」

「じゃあ、もしかして」

「そうー。わたしにもげるー。」

最悪だ。こいつが関わるのかよ。もう鬼ごっこのレベルじゃないぞ。

「あー。わすれてたー。子子子君も私の学校だ。」

「いや、ふざけるな! あいつが鬼ごっこなんかしたら例え現在のレベル5全員でも勝てねえだろ!」

「そうだよー。だから今回は参加しないって。」

胸をなでおろす時恩。あいつは厄介だ。あの能力を好んで相手にする奴はあの電撃娘ぐらいだろう。

もっとも、ただ勝負を挑んでパニックになるのは目に浮かぶがな。しかも「は」って。何か参加するのかよ…

「ほら、白井さん。こいつは次の俺の対戦相手なんすよ。だから勝負は今から始まってるんです。」

「本当にそうなの？」

「そうですよー。だからわたし体操服じゃないですかー。」

あれ？と時恩は違和感に気が付く。

紙名はファッションセンスでどこか決定的に外すのだ。本人はオシヤレだと言ってはばからないが時恩から言わせればただのアホだ。この前、無理やり連れて行かれたデートではマフラーをして来て無理やり首に巻かされた（その日の気温、38度）。

「やっぱりカップルはこうじゃなきゃね」と嬉しそうな顔をして、清楚なワンピースを着ていた紙名はとても可愛かったのだが、時恩は軽い脱水症状に陥った。

「紙名。お前にしては珍しいな。今日はファッションは気にしないのか？」

「してるよー。ラインがでないようにー。ノーパン☆」

こいつとうとう身に着けるものまでどころか、頭のネジまで外しやがった！！と驚愕する時恩だが

「やはりあなたはそういう方でしたのね…ここはやはり私が…」

「いやいや白井さん。本来けが人なんだから無理したら危な…ってガチで矢を飛ばさないで危険極まりない！」

わーぎゃー騒ぎながら逃げる時恩。時恩を追う白井と興味本位でそれを追いかける紙名。

大覇星祭はまだまだ始まったばかりである。

第十三話　開始（後書き）

更新遅くなつてすみません

第十四話く2く（前書き）

第二種目、鬼ごっこ開始です。

第十四話（2）

白井の追跡を何とか巻いた時恩は第二種目のスタート地点である競技場に来ていた。

既に両校の選手は準備を完了している。こちらの人数は数十名、対して向こうはその倍だ。これはゲーム性を高める為だ。鬼の人数は少ないほど、勝った時の得点が更に多くなる仕組みである。

（…お、いたいた。）

時恩は紙名を向こうの群衆に見つけた。そしてあの大口叩いた一団もいるようだ。

そこで時恩は係にある提案を告げる。

「すいません。確か、この競技って鬼の人数が少ない程、勝った時に学校に入る点数は高くなるんですよね？」

「ああ、そうだよ。ただし、負けたらゼロだがね」

つまり、大博打だ。人数を増やせばその分捕まえやすくなるが、得点に加算される分はあまり多くない。少ないとその分捕まえられるかは分からない。だから、捕まえられたらボーナスとして学校に多くの得点が入るのだ。確実な勝利を得るのか、大量得点を狙うのか、それも戦略だ。

「分かりました。ありがとうございます。」

時恩は自軍の陣地に戻り。そして告げる。

「この勝負、鬼は俺だけでいい。一人で全員を捕まえる。新記録で」

（って言ったからには、やらないとな。）

時恩は一人で相手チームを見る。相手は多いがそれはものの数ではない。人数に関係なく、場所に関係なく、相手に関係なく、装備に

関係なく。

ただ制覇する。覇権をにぎり覇壊し覇滅させる。
それが時空霸王、時恩劉導だ。

そしてゆつくりと自分の両腕と首のアクセサリーを外す。別にこれらには特殊な効果があるわけではない。ただの気分だ。自分が本気を出すためのいつものルーティンワークにしか過ぎない。時空霸王なら尚更だ。

その時、相手側の学校から挙手を上げる者がいた。どうやら以前すれ違ったグループの一人のようだ。

「一人ってアンタ俺たちをなめてんのか？」

何やら不良っぽい格好の男で威勢はいい。金髪で少しチャライ感じがする。身長も高い。おそらくモテモテだろう。そして、相当腕に自信があるようだ。

「なら、そっちが負けたら約束を守ってくれよな。」

時恩はそう言って空間移動し、相手の眼前に現れて録音のデータを渡す。

「ああ、予備も勿論あるからそれを壊しても無駄だよ。それに今わざわざ喋りかけてくれたからね。声紋で本人確認もバッチリさ」

不良は一瞬顔を赤くしたがすぐに気を取り直したようで

「だったらよお、俺たちが勝ったら」

「フオークダンスをわたしとおどるー」

いつの間にか紙名が二人のすぐ傍に来ていた。

「アア？紙名、テメエいつの間に」

「もんくあるー？」

そう言って不良を黙らせる紙名。可愛く小首を傾げれば大概の男は

落ちるだろう。本性を知らなければ、だが。

「じゃあけていい。時恩君、てをぬかないでねー」

「誰がするか。不公平極まりないさ」

そしてお互いのスタート位置に戻る。そして改めてルールが説明される。

- ・制限時間は一時間。その間に逃げる側が全員捕まったらその時点で鬼の勝ち。
- ・時間になっても捕まえられなかった場合、逃げ切った人数と捕まった人数を比較、多い方が勝ち。
- ・逃げる側も捕まえる側も能力の使用を認める。
- ・捕まえる、の判定は逃げる側の鉢巻を奪う事。逃げる側は必ず頭に巻かなければならない

以上が主なルールである。場所は第15学区。広場や運動場など、比較的広いスペースが多い地区だ。おそらく、能力を存分に使えるように、との事だろう。勿論、あらゆるところで生中継されている。鬼は捕まえる側がスタートして一分後に移動開始となる。

(…まあ、早速)

ルールは「移動開始」であり「能力の使用」ではない。今、この学区には自分のターゲットしかいないので人物の居場所を「ROOM-T」で特定するだけで終わらせる時恩。リアルタイムで更新していくのでいつもなら演算も複雑だが今回はそれほど負担は無い。ほかの能力への負担も大きくはない。

「じゃあ、行ってやりますか」

時恩の鬼ごっこが始まる。

(とは言っても、無理に追っかける必要はないからな。)

要は鉢巻を奪えば勝てるのだ。そして時恩は空間系のハイエンド。と、いう訳で

「ROOM-R」

先ほど「T」で捕捉した人数に狙いを定める。そして一気に

「…まあ、これくらいか」

三分の二以上の鉢巻が時恩の両手に現れた。つまり、これだけの人数が鬼が動き出してもその場にいた、ということ、それはつまり（相だなめられてるということになる、か。不愉快極まりないな）そして残りの鉢巻を奪うために本格的に行動する。大量の脱落者が出たことは既に知れ渡っているだろう。相当に警戒している筈だが

（それでこそ、やりがいがある）

（…残りはあと二つか。）

競技開始から19分。時恩はほとんどの鉢巻を手に入れていた。基本は傷つけないように、テレポートで手元に引き寄せていくが、どうしてもそうはいかない場合もある。そういう時は、背後に周り、一瞬で気絶させてゆっくり奪う。

（どう考えてもあの二人だよな）

一人は紙名、もう一人はあの不良である。先ほどから二人とも同じ行動をしている。一瞬も同じ場所に留まっていない。そして確実に広い場所を選んでいる。速度も走っては出すことの出来ないスピードだ。

（紙名は靴や路面を操作して移動してるだろうが…じゃあなんでこいつは付いて来れるんだ？）

時恩は紙名とは「それなり」に付き合いがある。移動速度で時恩は紙名に負けることは無かったが、紙名も決して遅くは無い。それに

付いていける、ということは相当の実力者。そしてこの都市で自分たちに相対出来るようなのは

(あいつ、今のレベル5だったのか)

時恩は二人を追いかけるのを止める。

そして新たに別の空間技術を発動する。

「ROOM—I」

「なあ、あいつ中々こつちが見つからないみたいだぜ。」

不良少年は紙名に話しかける。だが紙名は警戒を解かない。

「むりだよー。時恩君にはバレバレなんだよー。動かないとー。見つかると負けるよー」

「なら、直接あいつに会って動けないようにすればいいじゃないか」

「ぶっそうだねー。でもそれもむりだよー。そんなこと、侯劉さんくらいしかできないよー」

不良の言うことをことごとく否定していく紙名。そして紙名が時恩の事を話す顔は

「なんか、お前楽しそうに時恩のこと話すな。」

「そうかなー。えへっ」

こんな会話をしているが彼らは速度を緩めない。車並みのスピードで移動している。紙名は靴と路面を操作し高速で動く歩道を生み出し、立ちながら。不良は背中からの六枚羽を使い、浮遊しながら紙名に付いていく。

空間移動は要するに「点から点」の移動である。

だから常に動くことによって場所を固定させなくし、仮に先回りされてもすぐに逃亡可能な、横道や方向転換可能なスピードで移動し

ている。のだが角を曲がったところで

「発見」

時恩と二人は遭遇した。

「あれー？見つからないように頑張ったつもりなんだけどなー」

「さっきから同じ場所ばかり回っていれば見つかるだろ？」

「まさかーいつのまにか『I』つかってたー？」

「使ってた」

「うっそー。ひきょうだよー。一方通行君には何にも使わなかったのー。私たちには三つも使って」

「いや、四つだよ」

時恩はゆっくり二人に近づいていく。その歩みは特別早くはない。普通の歩みだ。だが二人は無抵抗で動かずにいる。

「な、なんで動けねえんだよ！」

「だからいってるじゃんー。みつかったらまけてー」

時恩は直接二人の頭から鉢巻を取る。不良っぽい男は心底悔しそうに、無抵抗でなすがままにされていた。

紙名は時恩が近くににいるのが嬉しいらしくニコニコしながらだった。むしろ「どーぞ」とまで言った。

「ところで、時恩君ー。これって「C」？」

「いや、「P」だ。「C」は別の技術にした」

「まだかえてるのー？そろそろきめないとー」

その声を聞き流し、時恩は紙名の鉢巻を取り終わる。そして試合終了の合図が響くと同時に競技場に「戻る。」

「まけちゃったねー。くやしい？」

「そりゃあな。悔しいぜ。」

「じゃ、つぎがんばろうよー。ね、垣根君？」

「…ああ、そうだな。このままじゃ、俺のプライドが黙っちゃいねえ」

第十四話く2く（後書き）

実は垣根君でした。

第十五話（前書き）

よろしくお願いします。

第十五話

結果、時恩は鬼ごっこに新記録の27分32秒で勝ち、大量のボーナス点を自分の高校にもたらした。その為、時間ぎりぎりまでクラスメート達に囲まれ休む暇なく、次のパトロールに向かう羽目になった。

その頃、窓の無いビルでは複数の人間が集まっていた。その数6人。その中で銀髪の男、侯劉が発言する。

「成程、あいつ本当に甘くなったんだな。」

「そうなんだよー。ただの鬼ごっこにROOM使うなんてありえないよー。」

侯劉だけではなく、その声は全員に届いている。だが、紙名はここにはいない。

彼らの仲間「卯奪^{うだつ}」の能力だ。彼女がいれば、どれほどの距離があらうとも会話は成り立つ。

「日常的に使っているのであれば、腕が落ちることはないだろう。完全にコントロールしなければな」

「そうなんだよねー。「I」と「P」同時に使うなんてー。やろうと思えば発狂させられる組み合わせだよー」

「そうさせない自信があったんだろう。そもそも昔なら相対した瞬間に八神技だろ？」

「だから、焦ったよねー。本気でヤバイって思ったけどー。でもそうならないなら、計画に支障はないはずだよ？」

「確かにな。ではこちらも移動する。お前も待機しておけよ」
「はいはいー。じゃあねー」

そう言って通信は途絶えた。侯劉はおもむろに周りの仲間を見渡す。今いないメンバーはおそらく都市に遊びに出てるのだろう。それもそうだ。珍しいだろう、10年先のお祭りは。

「さて、俺らも行こう。準備はいいか？」

ここはとある路地裏。先ほどまで何やら大乱闘があったようだが、今は落ち着いている。周りに屍が転がっているのを除けば、だが。

「あー、みんな、ゴメン。ちょっと行ってくる」

「あれ、麦野。超どこに行くんですか？」

「なんかさー、上からの命令でさー」

そういつて麦野は凄惨に笑う。

「レベル5の力、存分に発揮してこいってさ」

「あー、クソガキ。今日はもう帰れ」

「えー、なんでなんで。ってミサカはミサカは帰りたくないって貴方の服を引っ張ってアピールしてみたり」

「何も聞くな。大人しく家に帰れ」

「…わかった。ってミサカはミサカは貴方に不穏な空気を感じ取ったので素直に従ってみたり」

「それでいい。続きはまた明日だ。」

「絶対にだよ！ってミサカはミサカは目を輝かせるけれど心配な空気を試してみたり」

「心配すんな。ただの見世物さ」

「ねえ、アンタ」

「おー、ビリビリ。どうした？」

「っ！アンタまた…。まあいいわ。ちょっと付き合いなさいよ。」

「いや、今、そんな暇ないんだが」

「何よ、せっかく御坂さんの全力を見せてあげようと思ったのに」

「アナタサマ、イツモワタシガチコウゲキシテマセンカ？」

「…それもそうだったわね。なによその目…ごめん…なさい」

時恩は今のところ何事もなくパトロールしていた。ここは学園都市の中でも一番大きな学区だ。その為、競技場の広さも半端ではない。あまりにも大きいのでその競技場は最大級イベント以外に使われようがない。その化物競技場を通りかかった時ふと、時恩は目にした。空に浮かんでいる雲を。いや、雲自体は何も珍しくはないだろう。だが、時恩には見覚えがあった。

「あの雲…まさか」

時恩は迷いなく競技場に入る。その数分前にこの都市のレベル5が、そしてそのさらに前にはあの雲から人が下りてきたことは知らないまま。

かくしてこの競技場は、世界最大級の脅威を誇る競技場と化したのだ。

「レディースあーんどジェントウルメーン。ようこそ、このイベントへ！！」

中に入った時恩は唖然とした。この化物競技場が満席なのだ。そしてスタジアムの中心に、すなわち競技場内にいるのは

「うそだろ…レベル5が4人…」

時恩から見て右側にはこの都市のレベル5いる。しかも上位4人だ。そして彼らは横一列に並んでいる。つまり相手は別にいる、ということの時恩は逆サイドを見る。そこには

「あいつらっつ」

そこには侯劉をはじめ、6人の人間がいた。いや、正確にはさつきからベラベラ司会進行しているあいつも6人の仲間なので性格には7人になるが。

「では、この学園都市が誇るレベル5と、われら学校都市のレベル5のバトルを開催いたします!!」

競技場は最高潮に盛り上がっている。だが時恩はそれをひどく冷静に見るしかなかった。なぜなら、彼らを止めるには彼自身の最高技術「八神技」を使わねばならない。しかし、時空霸王はそもそも体力も演算もひどく使う能力だ。その為、一日に5つ以上は使わないよう、自らに課している。つまり

「使いどころを見極めないと…こっちがやられる」

「なアーンですか、この騒ぎは、要するに、虐殺ショーだろうに」
一方通行は面倒そうに答える。ちなみに、全員普段着だ。全力を出せるように、との事らしい。

「ってかよオ。下三人は何してンだよ？」

「第五位はサボリ、第七位は修行で。第六位はあちらからの留学生だから立場を考慮し見学、だとさ」

垣根が代表して答える。

「向こうも腕に覚えがあるらしいからな。案外楽しめるかもしれないぜ?」

「三下に興味はねエンだよ」

「侯劉さん。向こうは四人ですよ?誰が行くんですか?」

質問したのは虎峰だ。基本、侯劉以外とは喋ろうともしない。しかも声がくぐもっているから性別の判断もこれでは出来ない。

「そうだな…子子子、牛頭、卯奪、そして私だ。」

「分かりました…。私は馬天連ばてれんさんと見ておきます。それにしても長猪ちようちよさん、ノリノリですね」

「そういうやつだからな」

「さーで、遅れましたが、私、ミスターバタフライと申します！ちなみに私もレベル5でありますのでいごお見知りおきを！」

「…聞こえてましたね」

「そうみたいだな」

そして四人ずつが前に出てくる。相手側との距離は100Mほど。学校都市側の残りは後ろに下がるようだが

（学校都市なんてある訳ねえだろそんなもん！）

時恩は全体を見回せるように一番上に、すなわち屋根へ向かう。あいつらが何をするかが分からない以上、今は様子見だ。だが、一番上には先客がいた。

「本気出しちゃうよー」

「どけよ紙名、それどころじゃねえ」

「時恩君何言ってるの？」

紙名は顔だけで笑い、その他は全く笑わずに静かに言う。

「そもそも、君が、私たちを」

「分かってる。お前らにしたことは分かってる…でも」

「うん、私たちも理由は知ってる。だから、いまこうしてるんだよ」

「お前、何言ってる…」

「いいから見えて。さあ、始まるよー」

第十五話（後書き）

少し、更新できなくなります。ご容赦ください

第十六話く見世物く（前書き）

合宿に行っていたのでパソコン使えませんでした。更新遅くなり申し訳ありません。
では、始まります。

第十六話く見世物く

「それでは、ルールの説明です。至ってシンプル、四人全員を戦闘不能にした方が勝ちとなりまーす。」

長猪、改めミスターバタフライは司会進行を滞りなく進めている。一応、彼も競技場の中にいるので危険なのだが、おそらくこの後放送席にでも戻るのだろう。それでも彼も過去のレベル5ではあるのだが。

「あいつ、さっきから目障りね」

長猪の司会を見ていた麦野はそう呟くといきなり原子崩しを放った。壁も防御も関係なく貫く攻撃は、第三位以上のものだ。だが

「このように、競技場の周囲には私たちの内の一人による能力で壁が作られています！大抵の事では皆様に被害は及びません！」

原子崩しは長猪に触れた瞬間、軌道が変わり観客席の方に突っ込んでいった。それも席にぶつかる直前に見えない壁に阻まれて暫くすぶっていたが消失する。

「へえ、強いつてのは本当らしいわね。」

麦野は闘争心むき出しの笑顔を作る。一連の流れを見ていた他のレベル5もそれぞれ面白いことになるかと期待している。もともと、お互いを流れ弾で殺ってしまおうか、という考えがなかったわけではない。それぞれに浅からぬ因縁があるからだ。だが、そんな思惑は開始直後に吹き飛ぶことになった。

「それでは、スタートッ！」

その合図とともに長猪は大きく飛んだ。そのまま100M以上、上空に達し、放送席の方に落ちてくる。狙いたがわず放送席に着地し

た長猪は窓から中に入り実況を始める。その間はおそらく5秒ほどだろう。その間に競技場では

「えい」

卯奪が右の拳を振り上げ、振り下ろすという単純な動作で生み出せる得意技

「音鎚」
おとつち

を繰り出していた。音速での攻撃、そしてうかつに防ごうなら音そのものにより三半規管をやられてしまう。厄介な攻撃だが、学園都市側は誰も避けようとしない。頭上からの音鎚はそのまま着弾。高音とも低音ともつかない、直接体に響くような音が響き渡る。間近で聞いたら確実にしばらくは立てないだろう。

「やったね。これで私たちの勝ちだね！」

卯奪は跳ね回って喜ぶ。身長150？に満たないが顔は大人びている少女。だがそんな彼女が自分たちの中で唯一ともいえる能力の保持者であることを侯劉は理解している。それでも、一応まとめ役としての自分の役目を果たすために

「卯奪、よく見ろ。だれも倒れていない。」

その瞬間、子子子と牛頭が動いた。子子子は向かってくる一人を腰のコンバットナイフで食い止め、牛頭は極太のレーザーから侯劉と卯奪をかばう。

驚く卯奪だが、侯劉から見れば大したことではない。一人は電気を

操れるのだ。自分の中の電気信号を早くして常識では考えられない速さの反射神経、運動能力を持っているのだろう。もう一人も原子と名乗っているのだ。音が反響しないように壁を作るとは容易だろう。そして

「あの二人は無傷、か」

一人は六枚の羽根を広げ、もう一人は首に手を当てているだけだ。それだけで音鎧を防いだのだろう、強さが分かる。

「二人とも、大丈夫でしょうか？」

牛頭は何事も無いように二人に訊ねる。レーザー、つまり原子崩しを吸収したのだ。

「大丈夫だ。ただ、全員油断はするなよ。計画をうまく進行させないとな」

子子子はナイフを振るい、威嚇する。相手は御坂だ。左に逆手に持っており、右手は軽く握っているだけだ。

「危ないじゃないの、そんなもの振り回して！」

「問題ないよ、刃挽きしてあるから。まあ、下手に当たれば切れるかもね。」

「問題大ありじゃない！」

子子子は大柄ではない。かといって小柄でもない。至って普通の体格だ。その動きから鍛え抜かれているのは分かるが特に印象に残る訳ではない。

子どもに人間を書かせたら、おそらくこんな感じになる。それが御

坂の第一印象だ。

「ええい、鬱陶しい！」

御坂は磁力でナイフを回収しようとするが

「なんで何も反応しないのよ！」

「当たり前だろ？ そんな単純なミスしないよ」

ナイフは何も反応しない。おそらく体中に仕込んでいるであろう武器も何も反応しない。一体なぜか？ そもそもこいつは能力者のはずなのに何故武器を使うのか、御坂に疑問が浮かぶが

「こー君に手をだすなっ！」

叩奪の「音突」おとつきが御坂を横から吹き飛ばす。

「っ?!」

体内に直接響き渡る衝撃波、そして三半規管を揺さぶる音をまともに喰らった御坂。会場の一角からは声にならない悲鳴が上がる。

「そんなことしなくても大丈夫なのに」

「そういう問題じゃないっ。こー君だと相性悪いじゃん。あのレーザー女が相手じゃないと」

「…ああ、それもそうだな。侯劉が羽で牛頭は白髪か」

「そうだよ、だから早く行って」

それを聞いて子子子は麦野の方に向かう。相手は極悪の笑みを浮かべながらこちらが来るのを待っているようだ。先ほどの攻撃で自分の能力を見せつけたのだろう。そして、先ほどの中学生とのやり取りを見ていないわけではないだろう。能力を発動させながら確かに思う。

「俺の相手にはもってこいだな」

「そんなに大した攻撃じゃあないでしょう？早く起きなよ」

卯奪は御坂に語りかける。それでも反応が無いと知るや、腹部を蹴りつける。丁度音突が当たった場所だ。

「ぐはっ！」

その衝撃で御坂は覚醒する。頭を振りながらも、何とか立てるようだ。

「全く、中和してあげたんだから。早く早く。」

卯奪も御坂も理解している。お互いが戦闘狂だということに。御坂がふらつく足で立ち上がり、笑みを浮かべる。戦闘狂二人が激突する。

「はじめまして、というべきか。一方通行。私が相手しよう。」

「アア？三下に興味はねエンだよ」

「安心しろ、数発で終わらせてやるべき仕合なのだから」

「よう金髪。その羽、いかすね」

「ありがとな銀髪。せいぜい楽しませてくれよ。」

「まあ、君みたいなの相手はよくしてたし。すぐに終わるから」

国喰らい vs 一方通行

古代万象 vs 未元物質

それぞれ軍隊程度なら一人で壊滅させられる四人。
その四人が交錯する。

第十六話く見世物く（後書き）

本格的に戦います

第十七話　能力（前書き）

バトル：な展開になりませんでした。

第十七話〈能力〉

最初に勝負が決まったのは「国喰らい」と「一方通行」だ。

「国喰らい」牛頭が一步通行に迫る。距離を縮めながら右手からレーザーを放つ。さっき麦野が放ったものと全く同じものだ。人ひとり掻き消えるだろうそれを一方通行は避けもしない。ベクトル操作で弾き返す。

（アア？この程度か？）

弾き返したそれで自爆したのだろうか、それならつまらない奴だ。だが

「よそ見をするべきではなかったな」

「っ！」

一方通行の背後から声が聞こえた。

（さっきのレーザーはただの目くらましか！）

そう気が付いて後ろを振り返ったが

「遅かったな」

猫だましのように牛頭は一步通行の目の前で手を叩く。そして

「さあ、一方通行選手、ここで戦闘不能！まずは学校都市が一步リード！」

長猪の実況が響き渡った。その声を一方通行の意識は拾うことなく沈んでいた。

長猪の実況に最初に反応したのは御坂だ。自分の能力が一切効かない、あの相手は（認めるのも癪だが）確実に自分よりも強い。それがものの数秒で倒されたのだ。

（だったら、こいつも）

一步通行を上回る能力者なのかもしれない。ならばこいつに勝てばあのバカにも勝てる可能性がある。まずは

「あんたを必ず倒す！」

「へえ、やってごらんね。私の能力も分からないのにね」

「もう大体理解してるわよ」

先ほどの音速による攻撃、移動、そして防御を許さない振動。

「あんた、振動を操作する能力者でしょ。」

「おー。さすがは第三位。頭よろしいね」

卯奪は面白そうに笑い、

「50、いや、やっぱ40点かな。その位しか本質をつかめてないよ。だから、そろそろ「倒れて」ね。」

その「倒れて」の声を聴いた御坂の全身から力が抜けた。

「な、何したのよ、あんた！私に！」

「ひとまず言えるのは、やっぱりあんたじゃ力不足。第一位も牛君にやられるようじゃまだまだね。」

卯奪は妖艶な笑みを浮かべながら言う。

「だって、あいつ一番戦闘向きの能力じゃないもん。あ、私の能力の正解はね」

次の言葉を紡ぐ前に

「そいつに手エ出すな！」

一方通行が何とか自力で立ち上がろうとしていた。

（もう、これ以上だれ一人だって死んでやることはできない。）

脳裏に浮かぶのは一人の少女の言葉。だったら

（あいつも死なせるわけにはいかねエ！）

「ほう、無意識に酸素のベクトルを操作したのか。これは褒めるべきだな」

その立ち上がりとする一方通行の頭を踏みつける牛頭。

「だが、先にはいかせない。本来は気絶させるだけで済ますはずだったが、致し方無いな。」

一瞬、ほんの一瞬だけ一方通行の周りが透き通った。直後に肉が裂ける音。

「ふん、空気を吸収し、真空にして血液を沸騰させるつもりだけだったが：どうやら反射が仇になったか。体中の筋肉が裂けているか」そして一方通行は動かなくなった。

「おいおい、あっちは大変なことになってるけれど、助けに行かなくていいのかい？」

「ふん、俺の序列が上がるだけさ」

「そうかい、大変だね。順位があるのは」

侯劉と垣根。古代万象と末元物質。お互いに話しているのは世間話のようだ。だが、垣根はすでに六枚の翼を展開し、上空から殺人光線やありえない烈風を繰り出している。対して、侯劉は

「俺たちは順位とか無いから気楽だな。」

それらを真っ向から受け止めている。自信の周りに氷を展開させ、光線や烈風から身を護るようにして。

（さっきから氷しか使ってないってことは水を扱うタイプの能力者か）

垣根はそう見当をつける。ならば

（俺の翼を通過した光線、風の温度を灼熱に！）

能力で風と光線に変化をもたらし、侯劉にぶつける。氷はあっけなく溶ける。

そしてその風と光線は侯劉を襲い

「さんきゅー。」

侯劉の声が聞こえた。そしてその背中には

「うーん、まあ、久々にやっちまいますか」

紅蓮の翼が二枚、展開されていた。骨に皮と肉が張られたような、荒々しい翼。

それを使い、軽く羽ばたくようにして上空にいる垣根と同じ目線まで浮かび上がる。高熱の風も光線も確かに侯劉には当たった。だがそれがまるで涼しい風のように侯劉は受け流し

「んじゃ、こっちの番かな」

侯劉の周りにはいつの間にか青い炎が舞っていた。

それを見た垣根は熱を吸収し、それをエネルギーに変える物質を作り出す。

（そして、このエネルギーを俺に上乘せすれば、確実に俺の勝ちだ！）

垣根は勝利を確信した。

紅蓮と純白。二つの色は交錯する。

片方は蒼炎を従え、片方は天界の片鱗を纏い。

そして

「純粹に能力の差だよ。いくら物質つくっても」
地に落ちる純白に最後の言葉を贈る。

背中の紅蓮の翼に加え、更に蒼と黄金の翼が二枚ずつ加わる。

「俺に勝ちたきゃ神様でも引っぱり出してくるんだな。」
その言葉に共に巨大な雷を落とす。

（畜生が、ゴミはゴミらしくさっさと死ねよ！）
麦野の精神は追い詰められていた。

さっきから原子崩しを撃っているのだ。そしてあの子子子とかいうやつには絶対に当たっている。最初に近づいてきたときに、ナイフもろとも右腕を吹き飛ばした。それは確かだ。まっすぐに向かってくる相手を外すほどマヌケじゃない。だが、瞬きした直後に右腕どころかナイフすらも元通りになっていた。ナイフから察して向こうは接近戦タイプ、こちらは長距離タイプ。距離がある今の内に潰さない、向こうの射程に入ったらまずい。

そう考えるのも何度目になるのか、麦野のは分からない。思考がこれ以上先に進まないのだ。そして何度目かのバックステップで雷鳴が鳴り響いた。

（ああ、あのクソガキめ。集中を切らすようなことしやがって）
思わずそちらに向け原子崩しを撃ちこんでやろうと振り返る麦野。

振り返った麦野の目には倒れる垣根、そして既に倒れている御坂と一方通行が映る。

「なっ…」
自分も含め全員がレベル5そのうち3人が倒れている。
相手していた男もそれを見て

「じゃ、子っちも終わらせるか」

そういつて右胸のホルスターから拳銃を取り出す。

「ああ、大丈夫。実弾じゃないから。麻酔弾」

そういうが、彼はさっきから能力で勝負してこない。それが意味するものは、

「お前、無能力者なんだろうが！」

麦野は歯ぎしりするが

「いや、子の際だからはっきり言うよ？俺はレベル5だよ。でも同じレベル5でも企画が違う。俺たちは」

何のためらいもなく銃口を麦野に向けながら子子子は言葉を紡ぐ。

「本当に潰してきたんだよ。それぞれ国一つ、ね。」

「舐めんなア！糞が！」

麦野は原子崩しを撃ち、子子子は引き金を引く。

原子崩しにただの拳銃はかなわない。普通ならば。

だがただ一発の麻酔弾は原子崩しを突き破り、麦野を撃ち抜く。

「これで全員、」

「ま、待ちなさいよアンタたち……」

御坂はまだ意識を失っていなかった。だが、その分全員の惨劇を見てきた。

体中の血液が沸騰し、直後に肉を引き裂かれた一方通行。自分以上かもしれない落雷の直撃を受けた垣根。そして原子崩しを貫く銃弾を受けた麦野。

御坂の心はズタズタで自らのプライドも保てるかどうか、だった。

「あららだね。意識、まだあったんだね。」

「卯奪：お前、わざと意識奪わなかっただろ。心折るために。」

「えへへ、ばれたね。ごめんね。」

下をペロツと出して許してもらおうとする卯奪だが

「お前の趣味はえげつない」

子子子に一蹴されて落ち込む。

「まあ、この町最強の電撃使いならこれは受け止められるだろ」

侯劉は雷を頭上に作り出す。それはこのスタジアムの上空、能力を打ち消す壁に触れるか触れないかで大きくなり垣根を倒したときよりもさらに巨大化し一氣に集束、サッカーボールほどの大きさになり「受けきるのに失敗したら、どうなるかな」
一氣に打ち出された。

「紙名、羊帝はどこだ！」

「おしえなーい。」

「この不可侵域サンクチュアリを今すぐに解除しやがれ！」

「したら、時恩君、乱入するでしょ？」

「ここでそれ以外の選択肢はない！」

「そうだよなー。でもこれ、八神技でしか破れないもんねー。でもここで使ったら下に行っても何も出来ないもんねー。」

時恩の能力最大の欠点は一日に五種類しか使えない、ということ。そして八神技は同じく一回しか使えない、ということである。もともと、「力押し」で空間破壊は出来るのだが、これは隙が大きい。そして一点から一点にしかその威力は伝わらない。それにどうしても自分のかつての同志にその攻撃方法だけで無理だ。次の手は：

「わー、きれいな雷ー」

見ると上空に侯劉の雷が上がっていた。

「天雷…」

全力ではないのは分かる。だがあれはこんな、人ひとりに使う技ではない。この競技場全員が敵だとしてもまだ少ない。あれは対軍隊、に使うべき技だ。

「やめろ…」

やっとなんだ平和だ。あの生活から抜け出せたはずなんだ。なのに

「「やめろおおっ！」」

もう一人の声は上条当麻。

その右腕に宿るは幻想殺し。あらゆる異能を打ち消す力。

「上条！」

その声を聞きつけた時恩は一気に上条のもとに飛ぶ。

意思疎通はいらない。目で確認するだけだ。

上条は不可侵域を幻想殺しで殴りつける。甲高い音と共に解除された不可侵域だが

「んゝ俺はここにいたんだよねゝ。ナイスガイ」

観客の一人に混じり、サングラスをかけたファンキーな男がいる。

そこは時恩の反対側、そしてさっきまで紙名のいた位置の真下にあたる。

「んゝ灯台もと暗しってね。残念残念アンラッキー」

そして能力を発動させ、もう一度不可侵域を展開する。

第十七話　能力（後書き）

チートな能力ばかりなんですね、はい。トランプは。

第十八話く本性く（前書き）

長らく申し訳ありませんでした。

第十八話〈本性〉

「ねえー羊帝、なんでじおんくんってすぐに中に移動しなかったの？」

紙名はふと、思ったことを口に出してみる。

「んー、空間系の能力者はお互い干渉がノットな事知ってるだろ？つまり、俺がこの空間を作っている限り、あいつは中では何も出来ない。ただのケンカが出来る人間さ。」

羊帝は勝利を確信して答える。

そう、全てはこの時のためにあったのだ。永い呪縛から解放されるために。自由を手にするために。

競技場が一望できる最上階の客席、屋根もあり観覧には最適な場所に居座りながら、今か今かとその時を待ち構える。

「奴が死ねば、俺はフリーダムだ。」

「甘いんだな、それは」

突然、声が聞こえた。

紙名と羊帝が後ろを振り向くとそこには一人の青年がいた。

「んー紙名。観客は全員ゴーホームしたんじゃないのか？」

「したよ。させたよ。そして入口には誰も入ってこれないようにトラップ仕掛けといたんだけど？」

二人はお互いに疑問を抱く。

この人物は何故ここにいるのか？

どうやって入ってきたのか？
そもそも誰なのか？
ただ一つ分かっているのは

（こいつ：ヤバイ感じがする）

それは本能的なもの。生物としての危機回避。
何の学習能力も持たない赤ん坊でも、火を怖がらない赤ん坊でも、
高所には近寄らない。
無事ではすまないと判るから、だ。

「トラップ？そんなもんなかったんだな。」

その青年は笑って答える。

ぴったりとした白いズボンに黒い長そでのシャツ。足もとはスニーカーで少し長い黒髪。

だが、異様なのはその肌と目だ。色素が無いのだ。真っ白な肌に赤い目。男と分かったのは声が低いからであり、女装させればまず男とは見破れないだろう。

「全く、ジョンも無茶しやがるんだな。自分からこんな危ない方法取るなんて、」

青年は半ばあきれたようにつぶやく。

「こりゃ皆殺しする気なんだな」

競技場、いや処刑場になった場所に時恩と上条は飛び込んだ。後ろを振り返るとすぐに何かが周りを覆い始めた。

「不可侵域は中と外を区切るためのものだ。」

聞かれる前に時恩は説明する。

「そして外側からは全く別の映像が見える。おそらく、さっきまではスゲーいい勝負をしてたんだろう。誰もが声を出すことを、息をして邪魔するのを恐れるような、圧倒的な勝負を。」

なるほど、だから誰も止めようとしなかったのか。上条は合点がいく。そんな勝負を見せつけられては止めようにも止められない。まして正々堂々とのバトルなら、なおさらだ。しかし、

「お前がそう見えなかったのはその右手だろうな。これも能力の一つだから。俺はその範囲外にいたから大丈夫だったが…まったく厄介極まらないぜ。」

時恩はそう言って

御坂を背負いながら、
麦野を抱きかかえ、
こちらに歩いてきた。

「…は？」

上条と時恩は確かに同時に入ってきた。そしてさっきまで隣から声は聞こえていた。

惨劇を前にして上条は固まっていた。

そして目をつぶり、頭を軽く振って目を開けた時には、終わっていた。

相手は四人全員全て倒れている。

攻撃が一切通用しなかった大男も、背中に獣のような羽がある青年も、圧倒的な攻撃力を持つ男も、御坂を圧倒した少女も。

そして時恩は何事もなかったかのようにこちらに向かってくる。

「あ、そうだ上条」

時恩はそういつて一方通行と、垣根を上条のもとに移動させる。

「こいつら、お前が運んでって」

二人分の人間の下敷きになりもがく上条を見て笑う時恩は普段と全く変わりなかった。

「だから言ったんだな。」

その青年はため息をつく。

その声を聴くのは羊帝しかない。紙名は隣で腹部と胸部、両手両足に穴をあけられうつぶせに倒れている。

その羊帝も両肩を撃ち抜かれ、立っているのがやっとの状態だ。

「まあ、俺たちに立突くのが悪いんだな。」

そういつて青年は右の人差し指を羊帝に向ける。

「お前ら、絶対に許さな

最後まで言い切ることなく、羊帝の頭は消し飛んだ。青年の放つ莫大な光によって。

「暗部ごとき、トランプごときが俺たちに勝てる訳はないんだな」

青年はそういつて競技場内を見る。

そこには笑う時恩と、もがく上条の姿があった。

「人を殴り殺しておいて、その手で人を助ける、か。」

「アンタにしかできないんだな、そんな事は。」

その時、時恩がふと、こちらを見た。その顔には一瞬迷いが生じ、そして大声が聞こえる。

「あ、フィル！久しぶりだな！こっちこいよ！」

数年じゃすまない間会わなかった仲間にかける言葉が、まるで数日会わなかっただけみたいなんだな。

相変わらずの自由度の高さに呆れつつ、青年は声を返す。

「今いくよ、ジョン！」

第十九話〈始祖〉

「さて、何から説明したもんか」

「とりあえず負傷者の治療が先決なんだな」

「そうなんだけどね、目を覚ました後がね…」

「お前、もしかして何も話して無いんだな?!」

「その通り」

「相変わらずの自由度の高さなんだな…」

上条は突然現れた真っ白な男と騒ぐ時恩にあきれていたが、ふと気になった単語が出てきた。

「何も話していないって、時恩ということだ？」

こっちのことなど意にも介さずに時恩とやり取りしていた真っ白な男は

「お前、こいつの事なんて呼んだ？」

上条を凝視する。とても稀有なものを聞いたかのように。

「おいフィル。そんなことはどうでもいいだろ?」

「ジョンは黙ってるんだな」

そのやり取りで二人の間の空気が割れる。いや、御坂とか一方通行とか早く病院に連れて行かないと…と、上条は思いながら質問に答える。

「何って…時恩って呼んだけど」

その言葉に真っ白な男（時恩はフィルって呼んだ）はその言葉を聞いて一瞬黙り、爆笑した。

「ジョン、お前まだ「名前」があったのか」

ひとしきり笑った後、

「なら話はいつらが起きた後でする方がいいんだな」

目に涙を浮かべながらフィルは言った。

「うっせえよ」

時恩は空間移動しフィルの背後、やや上空に回った。そのまま膝をフィルの頭に蹴りつけようとして

「ほら、さっさと動くんだな。」

フィルはすでに両肩に麦野と御坂を背負って、反対側の出口に立っていた。そちらからだとかエル顔の医者の方に近いが

（いつの間にか？）

上条のその疑問に答えるように時恩は言う。

「奴には触れんよ。お前の右手は触れないと意味がないのならば」

そして残りのレベル5二人を空間移動させ、（おそらく病院だろう）

「あいつはお前の天敵：まさしく「天災」の「敵」だな」

後始末はあいつがやっている。だからお前は楽しめ。全て問題は解決した。敵は全て捕まえた。

時恩のその声に戸惑いを感じながらも土御門に連絡をとってみると

「上やん。もう終わっちゃった。つつうか終わらせられたぜい」

その声には疲労と虚無が混ざった、何とも言えない声色だった。

「なんか白い男がああ魔術師を攫っていったんだにやー。そして、帰ってきたと思ったら」

「いや、もういいよ。ところでさ、土御門、そいつこっちにも来たんだ。」

「それって何時ぐらいにや？」

「えーと、ついさっきなんだけど」

「え？だって真っ白が帰ってきたのは10分まえだぜい？」

そのことが何を意味するのか。ここから土御門のいる地点はおそら

く車でも10分ほどかかる。そこまで遠くないが、しかしつまり

「ほとんど同時にここにもそこにもいた、ってことか…？」

「そうなるぜい。一体何者なんだか」

「時恩はフィルって呼んでたけど」

「フィル？おい上やん。それって本当にそう呼んでたのか？」

「なんだよ急にシリアスモードになって」

「答えろ。そしてそいつは時恩をなんて呼んだんだ？まさかジョンとかじゃないだろうな？」

「なんで分かるんだ？」

「…上やん。時恩は今、どこにいる。」

「確か、病院に向かったはずだけど」

「そうか。今すぐにそこに行く。上やん、そこを動くな。」

そう言って土御門は電話を切る。

そしてしばらくしたら、土御門が競技場に来た。その顔は苦り切っている。

時恩が倒した四人を一瞥、一番手近にいた牛頭の首を掴むと一言

「死んでるな」

そして上条にむきなおり

「延髄を破壊されている。以前、上やんの頭を殴ったろ？あれをさらに急所を狙い、さらに強力な一撃を加えた、と考えてもらえばいい。」

そんな痛み、想像もしたくない。

「いや、痛みはない。むしろ死んだことに気が付いてないんじゃないか？」

それはつまり

「そう、即死だ。戦闘すら行われていない。」

「上やん、時恩の正体を知ってるか？あいつはただの隣人じゃない。」

「レベル6だろ？それも半端なく強いレベルの」

土御門はかぶりを振った。ある程度、予想通りになったかのように。

「上やん。俺たちが脳の開発によって色々な能力が出ているのは知ってるよな。じゃあ、どこをどういじればどんな能力が出るのか、だれが見つけたんだ？」

「そしてもう一つ。この学区は確かにスポーツ施設が多く存在する。だがな、この競技場は、地図に載ってないんだよ。大覇星祭用の地図プログラムに三日前に急きょ書き込まれた。こんな施設、だれが三日で作れるんだ？」

「そして、最後に。何故、二重能力者は存在しないって言われてるんだ？」

言われっぱなしな上条も、ここまで来たらさすがに反論する。

「そりゃ、あれだろ？脳への負荷が高すぎて」

「誰か、それを試したのか？そもそも脳を開発しておきながら何故そっち方面は解決できないんだ？」

土御門の疑問に答えられない上条。ステイルはすでに本国に戻っているという。この事態を報告するためだ。

「いったい、何がそんなに問題なんだ？」

「それはあいつらが復活してから話すよ」

いつの間にか、時恩が土御門と上条の真上、1mに胡坐をかいている。おそらく、空間を固定しているのだろう。

「時恩、お前、何しに来た？」

「勿論、目的を果たしに。」

それはどういう意味なのか。ただ呼びに来ただけか。それとも

「まあ、今は何もする気はないよ。まあ、ご近所だし、少しだけ疑問に答えておくよ」

時恩は二人の前に飛び降り、しっかりと目を合わせてこういった。

「断罪社創設者。脳のマップ開発に関係した四人、通称「ビギニン」の一人。年齢は、半端じゃないから聞かないで。」

そう言って、また時恩は笑った。今度は純粹な笑顔だった。

第二十話く対話く

「そういう事だ、上やん。こいつは」

「…で、お前はここで何をやっているんだ、虎峰。」

土御門が何かを言う前に時恩が先手を打つ。

「その金髪なら既に病院に向かわせた。赤髪の神父も本国に帰らせたのは本当だが…」

そこで時恩の目がずっと細くなる。

「友人に勝手に暴露話されるのは気分がいいもんじゃねえな。」

それはつまり先ほどまでの話は本当だということになる。

虎峰と呼ばれた土御門はしばらく黙った後

「何故ばれた？」

それだけ聞き返した。

「簡単だ。こいつはさっきまで病院にいた。そして俺より速い奴を俺は一人しか知らない。そして、さっきまでの土御門は間違いなく本物だ。何故なら」

「俺たちの事を表面上しか知らなかったから、か。」

「…」

「それで、俺の未来は？」

「無いね」

「そうか」

会話はそれで終わった。

土御門か虎峰か、そう呼ばれた男の上半身はバラバラに吹き飛んだからだ。

赤い赤い血と、バラバラの肉片と骨と、内臓の欠片と。

四方八方に飛び散った。

横にいた上条はそのシャワーをともに浴びた。

生臭い、鉄のような、硬い、ぐちゃりとしたものを全身に浴びた。

「これで、残りは何人だっけ…」

時恩はまるで夏休みの宿題があとどれくらい残っているのか、という調子で呟く。

「…おい」

「ん…？うわっ！上条！お前なんでそんなに汚れてんの？」

「……えろよ」

「何だって？」

上条は激昂して時恩の胸ぐらを掴みかかる。

「何もこんなことする必要は無かっただろ!! 何故殺した!!」

「何でって言われても…な。」

「さっき助けに入ったじゃねえかよ! 御坂たちを助けたじゃあねえかよ! なんてそんな風に」

「だって、あいつらは俺の敵だし。」

「敵だから殺してもいいのかよ!」

「…話しても分からんな。こればかりは。」

時恩は上条が掴みかかったことに驚き、暫く考え、

「レベル6になる為の実験てのがあったんだが、知ってるか？」

その言葉に上条は反応する。

それは彼が学園都市第一位と戦い、辛くも勝利してとある少女達を救った実験だ。

「知ってるっぽいな。なら話は早い。あの実験は」

そこで一息入れる時恩。

上条は次の言葉が予想が付いた。間違いであってくれと考えた。だが時恩の圧倒的な強さ、そして行動からすれば推測は成り立つ。何のためらいもなく殺す。その事に罪悪感を待たない人間。それを上条は知っている。そして先ほと言った「年齢」という言葉。それから推測できるのは

「俺達が最初の被験者。そして、俺は最高戦績でクリアした。」

「まあ、あの実験は俺の提案で始まったようなもんだ」

「だから、あいつらは」

「だったら何なんだよ!!」

上条はついにブチ切れた。

「お前が何人殺したとか、どう思ってその実験に参加していたのか、それは分からないし知りたくもねえよ!」

「でもよ…それが今でも簡単に命を奪っていい訳にはならねえよ!!」

「あんなに必死になってあいつら助けに入ったじゃねえか。そんな風に誰かを大切に思えるなら、それを誰かにも分け与えてやれよ。もう、殺さなくてもいいんだよ。」

いつの間にか上条は泣いていた。それを冷ややかに時恩は見つめる。

「話は終わるか。なら、今度は俺の番だ。」

「上条、戦争が起きる」

その声に上条は時恩を睨みつける。

「この都市と魔術の大戦が起きる。その戦争に、お前はおそらく巻き込まれるだろう。その右手もあるからには、必ずお前は狙われる。」

」
「そしてその大戦の裏には別の思惑がある。そして、こいつらはおそらくはその駒にしか過ぎない。こいつらを殺さなければ」

「関係ねえよ!!」

「は?」

「俺は! お前に! 今! 話してんだよ! これからの事とか関係ない!」

「もう、こんなに人が死ぬとこ見たくねえんだよ…」

そう言った上条は膝から崩れ落ちる。

そして上条の背後の死角になってはいたが50m以上離れている地点。

「よう、フィル。何しに來たんだ。」

「いや、やっぱりこうなったか、と思ったんだな。わざわざそこまで話すこと無いし、一番肝心な部分はやっぱりアンタは言わないんだな。」

「何か悪いか。」

「いや、悪くないんだな。不用意に巻き込ませることはしない方が賢明なんだな。」

「アレが始まるのはいつごろになりそうだ?」

「んなこと俺のネットワークでも分からないんだな。でも、一つ言えることは」

「そう遠くないうちに起きる…」

「その通りなんだな」

「で、他の奴らは？」

「ウルはアメリカに行ったみたいだな。」

「コスは？」

「あいつは今頃ロシアにいる筈なんだな。」

「…そうか」

時恩は崩れ落ている上条を見て

「なあ、こいつ、病院まで運んでくんねえか？ しかもお前の方が説明上手だろう？」

「仕方無いんだな…。ジョンは今から何を？」

「任された仕事を。」

そう言って時恩は日常に戻って行った。
ジャッジメントの仕事へと。

「さて、いかに話したもんかな」

広大な競技場には天災と天敵が残された。

第二十一話く二人でく（前書き）

少しずつの更新で申し訳ありません。
大目に見てください。

第二十一話〜二人で〜

「…ここは？」

上条はとある病院で目を覚ました。腕には点滴が繋がれているが、残りはもうわずかになっている。カーテンが周囲を覆っているのでよく分からないがいつもの個室とは違うようだ。

カーテンの外では誰か話しているようだが、どうやら上条が起きた気配に気が付いたようだ。

「お、起きたんだな。」

最初にカーテンを開けて入ってきたのは時恩から「フィル」と呼ばれていた男だ。改めて見ても肌は白い。少し見れば、女性と間違えてしまいそうな容姿だ。まあ、声が男のものなので判別は付くのだが。

「あの場所に曲がりなりにも少しはいたんだ。あんまり無理はさせたくないんだな。」

そう言って後ろ手にカーテンを閉め、上条を覗き込むフィル。顔が異様に近い。

もしかして、こいつ、向こう側の人間なのか?! と少しばかり不安になる上条。だが

「心配ないんだな。俺は至ってノーマルなんだな。」

表情から考えを読み取ったのか、苦い顔をしてフィルは言う。

上条は安心して、それと同時に思考が回り始める。

「ここは、どこですか？」

「ああ、ここは病院なんだな。あのカエル医者って言えば分かるだろ？他の全員もここにいるんだな。」

成程、あの医者か。

患者の望むものであればできる限りのものを揃え、死なない限りは生きて返す、凄腕の医者。
それなら、安心だ。

「で、時恩は？」

上条は一番聞きたかった事を聞く。

「一番に聞きたかったことは、一番目に聞くんだな。」

見透かされていた。

「まあ、答えてやるんだな。あいつは仕事に戻ったんだな。ジャッジメント、だったっけ？まあ、治安維持という仕事はあいつの分野なんだな。」

そうですか、と上条は俯きながら応える。未だに信じられないのだ。時恩があんな実験に関わっていたんだなんて。俯いた時恩に、ファイルはため息を一つつき、

「もし、アンタがジョンを不憫に思っているのなら」

「それはただの自己満足であり、自己解決なんだな。」

そう話しかけた。

驚いて、顔を上げる上条。

「要するに、おせっかいだ、と言っているんだな。俺の敵。」

フィルは表情を変えずに、氷が凍えるような、刃物が切断されるような目でそう言った。

「なんでだよ！あいつは…」

「誰が、奴が一方的に殺す立場にあるといったんだな。」

その言葉に、上条は固まる。

そうだ、あいつは被験者と言った。だが、クリアしたとも。そして。この場合のクリアとは

「あいつがレベルを上げるために大虐殺を起こしたのは認める。いつでも、どこでも奴は気まぐれでそれができるんだな。しかも、そのことが起こったことすらごまかしやがる。だから、敵はあいつをゴーストフォックス亡霊偽装と呼んだ。まあ、俺たちは能力名を短くしているだけだな。」

ならば、時恩は

「でもな、むざむざ自分のクローンを殺させる馬鹿がどこにいる？そんな奴は頭がイカレているんだな。」

いや、違う、御坂もクローンを作られた。あいつはそのことで随分悩んだ。学園都市最強の怪物に挑んでまで、他の妹達を救おうとし

たんだ。

「それは見上げた考え、とはいかないんだな。だって、それはその女、死のうとした、と言うことなんだな。何故、自分が死に、他を生き残らせようとするんだな？ そんなことしたって、残った奴は重いだけなんだな。」

それでも、あいつはそれしか思い浮かなかったんだ。

「でも、アンタが関わった。それで生き残った。犠牲を払わずに。」

それは…

「自分勝手だと言ってるんだな。あいつもクローンを大量生産された身、なんだな」

その言葉にカーテンの中は静寂が訪れる。上条は、その言葉が信じられなかった。

あいつも、御坂と、同じ？ でもやってることは、逆。一体なんで…

「教えてくれよ。なんで時恩は」

「ちょっと！ 離しなさいよ、黒子！」

「ダメですのお姉様！！ せめて、あの類人猿のところには行かせませんの！！」

絶妙のタイミングで邪魔が入った。どうやら御坂と黒子が見舞いに（黒子は違うようだ）来てくれたようだ。

「なら、続きはまた今度なんだな。」

そう言って立ち上がるフィル。

大きく伸びをして立ち去ろうとする背中に、上条は思い切って声をかける。

「なあ：俺の敵、とか天敵とか、どういう意味なんだ？」

その言葉に振り返らずにフィルは答える。

「俺の能力名は天地^{フィルワールド}対極。文字通り、天の敵、なんだな。」

「そして、天災、と呼ばれるお前の敵にもなりえる存在なんだな。」

そこまで言うとかーテン開けるフィル。

そこには御坂と黒子が取っ組み合っていた。

ただし、御坂はベッドに寝ていたのだが。

「あ、上条。この女と相部屋なんだな。」

言うのを忘れてた（絶対にフリだが）ように言うフィル。

その上条をまるで世界の敵のように睨みつける黒子。

その黒子を邪魔者扱いし、潤んだ目と赤い顔でこちらを見る御坂。

それを我関せずとばかりに傍観するフィル。

上条は不幸だ：とつぶやくしかなかった。

第二十一話く二人でく（後書き）

真打二人目です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9942u/>

とある自由な亡霊偽装《ゴーストフォックス》

2011年12月1日20時56分発行